

「南往き街道(1)」(2018年06月07日)

ボゴールの町の歴史は古い。4～8世紀にかけてタルマナガラ(Tarumanagara)王国が栄えた時代に作られた石碑が、現在のボゴール県のあちこちで発見されている。ところがタルマナガラ王国の名前を今に伝えるチタルム(Citarum)川は、ボゴール地方を通っていない。

バンドン市を囲む山岳地帯のひとつワヤン山(Gunung Wayang)に端を発するチタルム川はそのまま北に向かって流れ、カラワン県からブカシ県北部を通過してジャワ海に注いでいる。

タルマナガラは王都をブカシに置いてスダプラ(Sundapura)と称したようだが、ボゴール県で石碑が多数見つまっていることから、ボゴール一帯も重要なエリアであった印象が濃い。

7世紀には王国内部での紛争によってガル(Galuh)王国が生まれ、タルマナガラはそれに対抗してスダ王国へと変身して分裂状態に陥った。タルマナガラの衣鉢を継ぐスダ王国とガル王国、そしてジュパラのカリガ王国や中部ジャワの古マタラム王国などが並立する時代に入り、スマトラのスリウィジャヤ王国が支配を拡張してきた時期もあれば、古マタラム王国が勢力伸長を行った時期もあって、混然一体とした時代が続く。

スリウィジャヤは衰退を始め、古マタラムは東方へ遷都するなどの変化の果てに、スダ王国が外部の支配権から離れてかつての支配権を取り戻したことが、ボゴール県クブンコピー(Kebun Kopi)で発見された(西暦)932年の年号を持つクブンコピー第2碑文に記されている。

1030年代にスダ王国を治めた大王はパクアン(Pakuan)を都としたようで、その時期は現在のボゴールが西ジャワの王都になっていた。しかしその後もガル王が統一スダ王国の王位に就いたときはガルのカワリ(Kawali)が王都になり、またサウンガラ(Saunggalah)など別の地方が王都になった時期もあって、ボゴールが恒常的に王都だったわけでもない。

ガルとスダの連合王国の態をなしていたスダ王国も、1482年にジャヤデワタ(Jaya-dewata)王が即位したことで名実とも統一王国に復帰した。ガルの王位継承者だったジャヤデワタ王はスダ王国の王女を妻にした。ガル王がジャヤデワタに王位を譲り、スダ王がジャヤデワタ王の妃に王位を譲ったことで、ジャヤデ

ワタ王の下に二王国は合体することになる。

このジャヤデワタ王がスندا地方で伝説の英傑シリワギ(Siliwangi)大王であると目されている。ジャヤデワタ王はパクアンパジャジャラン(Pakuan Pajajaran)を王都に定め、それ以降の諸王はパクアンで治政を行ったことから、ポゴール市はジャヤデワタ王即位の日である1482年6月3日を市の創設記念日と定めて毎年その日を祝っている。[続く]

「南往き街道(2)」(2018年06月08日)

スندا王国は首都の名前をとってパジャジャラン王国とも呼ばれる。パジャジャラン王国の威勢が陰り始めたのは、ドゥマツ(Demak)やチルボン(Cirebon)に興ったイスラム国家がイスラム化との二人三脚で周辺のヒンドゥブダ社会に対する変革と支配に向かい始めたのが発端だった。その勢力伸長に脅威を覚えたパジャジャラン宮廷は、マラッカを攻略した反イスラムの急先鋒であるポルトガル人と手を結ぼうとする。

ポルトガル人にとってはジャワ島西部に寄港地を持つことが急務であり、更に将来のジャワ島における足場を固めるためのくさびを打ち込んでおく必要性からも、パジャジャラン王国の置かれている立場を奇貨として、同盟への働きかけを熱心に行った。パジャジャラン王宮上層部がマラッカのポルトガル要塞に招かれたこともあったようだ。

一方のイスラム勢力側は、パジャジャラン王国のその動きを早急に制止するべきものととらえた。ポルトガルの軍事力が後ろ盾につけば、西ジャワのイスラム化は目途が立たなくなる。

ポルトガルがマラッカ王国を滅ぼし、その地を奪ってほどなく、ドゥマツ第二代スルタンのパティ・ウヌス(Pati Unus)がジュパラとパレンバンの王国を誘って1513年に百隻もの大軍船団に5千の兵力を乗せてマラッカ進攻を行ったが、半分以上の船が沈められ、多数の兵員が海のもくずとなり、ポルトガル軍事力の圧倒的強さを見せつけられたことは記憶に生々しい。その後60年もの長期に渡って、中部ジャワ北岸地域の諸王国がパティ・ウヌスの遺志を継いでマラッカ進攻を企てたものの、マラッカのポルトガル人はことごとくそれらを撃退している。

ドゥマツ王国第三代スルタンのトランゴノがチルボン王国と共同でパジャジャラン王国とポルトガル人の提携を粉碎する動きに出た。パジャジャラン王国最大の海港バンテンと、王都パクアンにもっとも近いカラパの港を占領するのがその戦略だ。

総大将をチルボンのスルタンの息子シェッ・マウラナ・ハサヌディン(Syekh Maulana Hasanuddin)、ドゥマツのスルタンの妹を妻にして義理の弟になったファタヒラを戦闘指揮官とするチルボンとドゥマツの連合軍は1526年に海路からバンテンに攻め込み、激戦の末にバンテンを奪取して、その地をチルボン王国の属領に変えた。続いて1527年、ファタヒラの率いるバンテン軍はカラパを奪い、その地をバンテンの属領にした。

時のパジャジャラン国王はスラウイセサで、かれの1521年から1535年までの治世の間に15回戦争が行われている。バンテンに足場を築いたチルボン王国が、チルボンとバンテンのふたつの軍事拠点から絶え間なく内陸部のパジャジャラン王国に向けて軍事行動を行っていたことが、そこから見えてくるにちがいない。

[続く]

「南往き街道(3)」(2018年06月11日)

王都パクアンパジャジャランはイスラム勢による軍事攻勢に耐え切れず、ニラクンドラ(Nilakendra)王(在位1551-1567)の時代に放棄されて王家は都を移した。そして王国最期の大王ラガ・ムリヤ(Raga Mulya)のとき、根拠地としていたパンデグララン(Pandeglang)が制圧され、パジャジャランスンダ王国は1579年ついに滅亡するのである。

海港バンテンの攻防戦から半世紀を超える長期に渡って、パジャジャラン王国がイスラム勢力からの軍事攻勢に圧されながらも耐え続けてきたことは、パジャジャランのひとびとの精神的強靱さが並大抵のものでなかったことを示しているように思われる。

パジャジャランスンダ王国のパクアン放棄は、初代スルタンハサヌディンの息子で第二代スルタンとなったマウラナ・ユスフ(Maulana Yusuf)の戦功だ。パクアンが陥落すると、バンテン側はその王都を街として維持することに興味を示さず、破壊しつくして荒野に変えたい。港湾都市を根拠地として通商交易を経済ベースに置いているバンテンにとって、内陸部のポゴールを要衝として維持することに何のメリットも感じなかったということなのだろう。

バンテンスルタン国を懐柔したバタヴィアは、奥地にある高原部への探検活動を開始する。1687年にスキピオ(Scipio)とリーベーク(Riebeeck)の率いる探検隊がボゴール高原の寂れた村に大きな街の遺跡を発見した。また、あちこちに散在していた碑文を発見して解読し、そこにパクアンという王都があったことを知る。

しかしオランダ人のボゴール進出はずっと後になる。第27代VOCバタヴィア総督ファン・イムホフ(Gustaaf Willem baron van Imhoff)が1744年に自己使用のためのヴィラの建設を命じたことで、ボゴールをオランダ人の保養地区とする方向での開発がスタートした。当然ながら、周辺地区での農業活動も視野に入れてのものだ。

1750年に完成したファン・イムホフ総督の別荘は、その後代々の総督が使用するようになり、折に触れて改装が加えられた結果ヴィラの雰囲気ははるかに公的な宮殿の形に変化して今日に至っている。現在の大統領専用ボゴール宮殿がそれだ。オランダ人によって開発が進められたこの町を、オランダ人はバイテンゾルフ(Buitenzorg)あるいはサンスシ(Sans Souci)と呼んだ。

ファン・イムホフ総督は一年後、チサルア(Cisarua)・ポンドッグデ(Pondok Gede)・チアウィ・チオマス(Ciomas)・チジュルッ(Cijeruk)・シンダンバラ(Sindang Barang)・バルブル(Balubur)・ダルマガ(Darmaga)・カンブンバルの9ディストリクトをひとつの行政単位にまとめて Regentschap Kampoeng Baroe Buitenzorg というレヘント行政区にした。その結果、グデ・パンラゴ山系からサラツ山一帯の山岳地帯を含めてバイテンゾルフという地名が定着することになる。[続く]

「南行き街道(4)」(2018年06月12日)

ボゴール市を代表するアイコンのひとつに、ボゴール植物園がある。ボゴール植物園は最初、ファン・イムホフ総督の別荘の庭園として作られたものだ。ジャワ島がイギリスに占領されていた時代、英国東インド会社ジャワ副総督となったトーマス・スタンフォード・ラフルズ(Thomas Stamford Raffles)が庭園を植物園にするよう命じ、植物学専門家のケント(William Kent)がロンドンのキューガーデンに似せて整備した。

実はパジャジャラン王国のジャヤデワタ王の時代に、サミダ(samida)と呼ばれる広大な森林が造園されていたことがバトウトゥリス碑文に記されており、サミダは現在のボゴール植物園の土地をその中に包含していたようだ。そういう地縁はあったとしても、ボゴール植物園はあくまでもヨーロッパ文化の賜物と言うことができるだろう。

ボゴール植物園には妻のオリヴィア・マリアンヌ Olivia Mariamne の死を悼んでラフルズが設けた追悼碑がある。ガゼボの中央に立てられた碑文には愛する妻を偲ぶ英語の詩が記されている。

オリヴィアの死は1814年11月26日で、バタヴィアでマラリアに罹患した妻をラフルズはバイテンゾルフに移して療養させたが、その甲斐なく没した。ボゴールの追悼碑はオリヴィアの墓でなく、また植物園内にもオランダ人墓地があるものの、オリヴィアが葬られたのはバタヴィアのオランダ人墓地のひとつだった。現在の碑文博物館がそれで、かの女の墓は今もそこにある。

植物園内にあるオランダ人墓地は小さな規模で、あまり目立たない場所にある。わたしは頻繁にボゴール植物園をピクニックに訪れてその中を歩き回るのを好んだ時期があり、あるとき行方定めずにあまりひとのいない方向へ進んで行くと、竹やぶのはずれに墓地を見出した。来園者もほとんどその存在を知らず、地元民は墓地を畏怖の対象に見なしていることから近寄るひともしなかつたためだろう、ひとの姿を見かけないその場所は実に落ち着いて平穏な雰囲気が漂っていたことを記憶している。

墓碑の中でもっとも古い年号のものは1784年で、オランダ人薬種商コルネリス・ポットマンズ(Cornelis Potmans)のものだそう。反対に一番新しいのは1994年のオランダ人AJGHコスタマンズ博士(Dr. Andre Josef Guillaume Henry Kostermans)のもので、かれは植物学研究のためにインドネシアに帰化してボゴール植物園を生涯研究の場にしたらしい。

他にもジャネット・アントワネット・ピーターマーツ(Jeanette Antoinette Pietermaat)、エリザベート・シャルロット・ヴァンソン(Elisabeth Charlotte Vincent)、ハインリッヒ・クール(Heinrich Kuhl)、ファン・ハッセルト(J.C. Van Hasselt)、ファン・デン・ボッシュ(E.B Van Den Bosch)、アリ・プリンス(Ary Prins)、ド・イーレンス(D.J. de Eerens)などの名前を種々の墓碑に見出すことができる。[続く]

「南往き街道(5)」(2018年06月13日)

ド・イーレンスは第46代VOCバタヴィア総督を1836年から40年まで務めた人物で、1840年にバイテン

ゾルフで没した。総督在任中にバイテンゾルフで没したのはかれが唯一だったそう。アリ・プリンスも第53代と55代の二度総督を務めた人物だ。但し、二度とも臨時総督だったのだが。

別の折にわたしは植物園内のその墓地を探してみたが、見つけることができなかった。今インターネットで情報を探ると、植物園第2ゲートの近くであることがわかる。

第2ゲートは植物園外周の西側のジュアンダ通り中央付近にあり、郵便局の脇が入り口になっている。ジャボデタバッコミュータ電車でやって来ればそのゲートが一番の最寄になる位置にある。

その郵便局は元々エクメーネ教会として建てられたものだ。1845年4月13日にヤン・ヤコブ・ロフセン(Jan Jacob Rochussen)第50代総督出席のもとにオープニング式典が行われ、それ以来クリスチャンとカソリックが交互にミサを行う共用教会として使われた。

しかしまずカソリック側が1896年にバンタマーウエフ(Bantammer Weg、今の Jalan Kapten Muslihat)にカテドラル教会(Gereja Katedral) を建ててそこから去り、残ったクリスチャン側も1920年にゼバオツ(Gereja Zebaoth)教会を建ててそこから移った。エクメーネ教会からカテドラル教会はほんの150メートル、ゼバオツ教会は100メートルしか離れていない。

ゼバオツ教会の縁起は、最初ファン・リンバーフ・スティルム(J.P. Graaf Van Limburg Stirum)第66代総督がボゴール宮殿表門に荘厳な教会を建てることを呼びかけたことに始まる。完成した教会は最初ウィルヘルミナ女王教会と名付けられ、ミサは植民地政庁高官や西洋人の貴顕淑女だけを対象にして、オランダ語でのみ行われた。建物の上に風見鶏が設けられたため、ゼバオツの発音に苦しんだプリブミたちはニワトリ教会(Gereja Ayam)と呼ぶようになり、今日に至っている。

使われなくなったエクメーネ教会はバイテンゾルフ市庁が郵便局として使うことを決め、今現在もインドネシア共和国が郵便局として使用している。

ジュアンダ通りが南に下りきると植物園の南縁に沿って東に向きを変える。そしてスルヤクンチャナ(Surya Kencana)通りが南から突き当たってくる三叉路でジュアンダ通りは終わり、その先はオティスタ(Otista)通りと名を変えてバタヴィアとバイテンゾルフを結ぶ街道に向かって直進して行くのである。

ボゴール植物園のメインゲートは、そのスルヤクンチャナ通りが突き当たってくるところだ。そしてメインゲートに入ってすぐ左側の一角が、研究施設の集まっている場所になっている。[続く]

「南行き街道(6)」(2018年06月14日)

ジュアンダ通りが東に向きを変えてからわずかな距離の場所に、われわれは小さな博物館を植物園敷地側に見出すことになる。これがボゴール動物学博物館(Museum Zoologi Bogor)だ。植物園敷地内南西角のエリアは研究施設が集まっている場所であり、この博物館は最初からボゴール植物園の付属研究施設として設けられたものだった。1894年に農業動物学研究所(Landbouw Zoologisch Laboratorium)がオランダ人植物学者コニングスバーハー(J. C. Koningsberger)の提唱で設けられ、1906年に動物学博物館兼作業場と名を変えた。1910年になって動物学博物館兼研究所に昇格している。

ボゴール宮殿の庭園からボゴール植物園に移行する発端は、イギリス占領期を終えて東インドがオランダに返還された後、最初のオランダ植民地政庁総督に任命されたファン・デル・カペレン(G.A.G.Ph. van der Capellen)の時代に戻る。東インド総督はVOC時代から通算で数える習慣になっているため、それに従うならファン・デル・カペレンは第42代総督に当たる。

生物学者アブナー(Abner)が有用植物農園・研究者育成・他の植物園に分配するための植物コレクションと開発のためのセンターとしての場所を設けるアイデアをファン・デル・カペレン総督に提案した。

プロイセン出身でオランダに移住したカスパー・ギオーグ・カール・レインワルト(Caspar Georg Karl Reinwardt)教授が蘭領東インド植民地政庁の農業芸術科学局長の職にあり、そのアイデアに沿ってバイテンゾルフ宮殿の庭園をその目的に使うようになる。

そして1817年5月18日、ファン・デル・カペレン総督はその庭園を公式に's Lands Plantentuin te Buitenzorgとして開所した。バイテンゾルフ・ナショナルボタニカルガーデンだ。

レインワルツ教授は植物園としての整備を、最初ラフルズに命じられてそれを手掛けたイギリス人ウイリアム・ケントと、ロンドンのキューガーデンのキュレーターだったジェームズ・フーパーの助力を得て、実行した。

レインワルツ教授は1822年までバイテンゾルフ植物園の所長を務め、その間にハーバリウムコレクションの収集を行っている。

そして所長が何代も交代したあとの1868年5月30日にやっと、この植物園がバイテンゾルフ宮殿の監督下からひとつの研究機関として独立した。[続く]

「南行き街道(7)」(2018年06月18日)

さて、1750年に別荘が完成してファン・イムホフ総督がそこを使い始めると、侍従や執事から下働きの者たち、そして警備や連絡担当の者たちに至るまでが一団となって付き従ったことは疑いがない。

別荘内の片隅に同居できるだけの資格や機能を持たないひとびとが、別荘の周辺に集落を作ったことは想像に余りある。ましてやその後、歴代総督がその別荘を利用し、ついにはバタヴィアを去ってバイテンゾルフで執務する総督が出現するに及んでは、バタヴィアの諸官庁がバイテンゾルフに出先を置かなければどうしようもなくなる状況に立ち至るわけだ。総督の職務や立場に関わる諸機能がバイテンゾルフ宮殿の北側に集まったのは、当然のことだったにちがいない。南側は広大な植物園なのだから。

こうして自然発生的に総督宮殿の北側が政府機関やヨーロッパ人エリートの居住区になっていく。一方、華人は中心部からあまり遠くない場所に集まって商業地区を形成し、プリブミはそれらの間隙を埋めながら、更に農業地区に拡散するといったありさまがオランダ人が開発したボゴールの町に展開されて行った。

オランダ人を主体にするヨーロッパ人地区は、現在のジュアンダ通り～スディルマン將軍(Jend. Sudirman)通り～Aヤニ(Yani)通りやもっと北側のチワリギン(Ciwaringin)地区から東方のタマンクンチャナ(Taman Kencana)に至るエリア、また植物園の周囲を包むエリアなどで、教会・病院・学校などの社会施設も充実していた。

もちろんヨーロッパ人の間でも官職や経済力の格差が居住エリアに反映され、上級者は大通りに面した豪邸、中下級者はもっと狭い通りを奥に入った中小規模の家屋というような生活様式が顔を覗かせていた。

華人は植物園の南方から植物園メインゲートに突き当たってくる今のスルヤクンチャナ通り境界を活動場所としてきたが、これはバイテンゾルフ市庁が行った方針によるものでもある。1845年7月6日に出されたバイテンゾルフ市長決定書には、ハンデルストラート(Handelstraat)を華人の居住区とするという確定方針が記されていた。そのハンデルストラートが共和国独立後プルニアガアン(Perniagaan)通りに改名され、もっと後になって現在のスルヤクンチャナ通りに名を変えている。

多分1845年7月の決定書が出るはるか以前から、華人はそこで商業活動を行っていたにちがいない。そこをバタヴィアのようなチャイナタウンにしようとして、オランダ人はバタヴィアやバンテン、更には遠くジャワの華人社会に働きかけた。バイテンゾルフのあちこちに出現した華人商業スポット(職住一体地区)を一カ所にまとめることもその方針に含められていたにちがいない。

華人の成功者たちは市の中心部からより離れたスルヤクンチャナ通り南部地区にヨーロッパ風の邸宅を建てて住んだ。[続く]

「南行き街道(8)」(2018年06月19日)

1834年10月10日に起こったバイテンゾルフの南西15キロに位置するサラッ(Salak)山の噴火による大地震で、バイテンゾルフ宮殿は大きな被害を被った。宮殿の改修工事が行われている間、不自由になった施設を補完するために宮殿の左向かいに建物が作られた。この建物が1856年、ビンネンホフホテル(Binnenhof Hotel)として公式に営業を開始する。現在のホテルサラッ・ザヘリテージ(Hotel Salak The Heritage)がそれだ。

ところが1913年、資金難に陥ったビンネンホフホテルは身売りしてアメリカンホテルと名を変えた。だがアメリカンホテルの大株主だったディベッツ(E.A. Dibbets)は1922年に会社を倒産させてホテルの経営を一手に握る。屋号をディベッツホテルと変えての再出発だ。

だがそれも長続きしない。ホテル名は1932年にベルビューディベッツ(Bellevue-Dibbets)ホテルと改名された。実は19世紀にベルビューホテルというのがバイテンゾルフの別の場所にあったのである。

どうやらその老舗のベルビューホテルがバイテンゾルフの西洋人向け高級ホテルとして最初のものだったらしい。少なくともビンネンホフより古くからあり、イギリス人生物学地理学者アルフレッド・ラッセル・ウォーレス(Alfred Russel Walles)が1830年にバイテンゾルフ植物園を訪れたとき、ベルビューホテルに投宿したことが書き残されてある。

そのベルビューホテルがあったのは、現在ボゴール植物園南西角の向かいに建っているボゴールトレードモール(Bogor Trade Mall)の場所だ。ベルビューホテルは1900年代に入って店を閉めたため、ディベッツは誰に断りもなしにその名前を使うことができたようだ。

19世紀後半にバイテンゾルフには西洋人向け高級ホテルがもう一軒あった。デュシュマンドフェール(Du Chemin De Fer)ホテルがそれだ。フランス語の鉄道という屋号が示す通り、このホテルはバイテンゾルフ鉄道駅のすぐ近くを立地にした。鉄道駅のそばに設けられたウィルヘルミナパーク(Wilhelmina Park)の道路をはさんで向かい側だ。

そのウィルヘルミナパークはインドネシア共和国独立後タマントピ(Taman Topi)と名を変えたあと、現在はアデ・イルマ・スリヤニ公園と名する遊園地になっている。そしてデュシュマンドフェールホテルも、古い建物のまま現在はボゴール市警本部として使われている。この旧高級ホテルに限っては、いくら無料だと言われてもお泊りを避けるほうが無難だろう。

ベルビューディベッツホテルは1942年の日本軍による占領で接收され、日本帝国軍憲兵隊がバイテンゾルフ地区本部として使った。1945年暮れに復帰してきた東インド植民地文民政府が再び自国資産として握ったものの、インドネシア共和国主権承認に伴ってインドネシア政府に移管され、インドネシア側は1950年にそこをホテルサラッとして営業を再開させた。その後何度か大改装が行われ、最新の大改装は2000年で、ホテルサラッ・ザヘリテージとして現在に至っている。[続く]

「南行き街道(9)」(2018年06月20日)

ホテルサラッの裏のエリアはグドンサワ(Gedong Sawah)という地名になっている。これは昔水田地区だったところにオランダ人がお屋敷(巨大な建物)を建てたことに由来しているようだ。

ホテルサラッの南隣は現在ボゴール市庁舎として使われているが、その建物は1868年にクラブハウス(De Societeit)として建てられた。1926年ごろには、当時の植民地ライフスタイルのヨーロッパ化がもたらした影響だろうか、お仕着せの社交場は人気落ちたらしく、既にオランダ人がバイテンゾルフ市庁舎として使い始めている。

1949年にこの建物を移管されたインドネシア共和国は、ボゴール・チアンジュル・スカブミを管区とする第061軍管区スルヤクンチャナ旅団司令部としてそこを使い、1971年にボゴール市庁舎となって今日に至っている。

一方、道路をはさんで東側にあるのが、1856年から1858年にかけて完成したと見られている古い建物だ。平屋の多い当時の建物の中で二階建ての豪壮な威容を誇っているこの建物は最初、バイテンゾルフ副レジデン公邸として建てられた。一階が執務場、二階が寝室になっている。寝室が多数設けられたのは、それほど多くの客人を宿泊させる必要性があったということなのだろう。二階の寝室のベランダからはバイテンゾルフ宮殿の表庭が眺められ、宿泊者は滴のような緑を目にしながらか茶やコーヒーを味わっていたにちがいない。

総督がバタヴィアのレイスウエイクにある官邸を離れてバイテンゾルフ宮殿に執務場所を移すようになった時、離れていては仕事にならない総督官房(Algemene Secretarie)もバイテンゾルフについてきた。一時期、総督官房がこの建物を使ったこともあるそうだ。現在ここは西ジャワ州庁の役所のひとつとして使われている。

その更に東側は現在、カソリック系私立教育機関レジナパチス(Regina Pacis)が運営する総合学院になっている。この学院は幼稚園から小学校・中学校・高校までの全レベルを擁して、宗教を基盤に置いた一貫教育を実施している。

学院のオープンは1948年で、最初は幼稚園と小中学校でスタートし、高校は1955年に開設された。中高は女子生徒だけを入学させていたが、中学は1957年、高校は1962年から男女共学にしたそうだ。

バタヴィアからバイテンゾルフに向かってやってくる道路がバイテンゾルフ宮殿の真正面に達すると、道路は左右に流れて宮殿と植物園を包む環状道路になる。宮殿に入って行く者は広大な庭園の中の道を更に5百メートル近く進んでやっと宮殿主館の玄関にたどり着くという仕儀になっている。

そのバタヴィアとバイテンゾルフを結ぶ街道の南端西側にあるレジナパチス学院敷地内には百年を越える歴史を持つ礼拝堂(kapel)がある。ジュアンダ通り沿いで北から西にかけての行政地区の一部として、そこが19世紀後半に豪壮な建物が立ち並んだ中の一コマであったことは容易に想像がつく。

学院が建設される前の日本軍政期にはその場所が俘虜収容所に使われていたそうだから、建物があり、また地区一帯が明瞭に外部と仕切られる形になっていたことは間違いないだろう。[続く]

「南行き街道(10)」(2018年06月21日)

そのバイテンゾルフ宮殿の真正面に北から下ってくる道路はフローテウエフ(Groote weg)と名付けられ、宮殿の西半分を迂回して植物園の裏手中央地点まで伸ばされた。現在のスディルマン將軍通り(Jl Jend. Sudirman)からジュアンダ通りの全域をカバーしている。

そのスディルマン將軍通りの側は全長1.5キロの完璧な直線道路で、現在インドネシア語でピラルプティ(Pilar Putih)と呼ばれているヴィッテパアル(Wittepaal)の設けられた場所で枝分かれし、直進する方はプムダ通り(Jl Pemuda)となったあとさまざまに名を変えて、一路30キロ、シャステレインが18世紀初期に開発したデポツに向かって北上する。

分岐して東に向きを変えた方の道路は現在のAヤニ通りで、2キロほど北東に伸びた後、メステルコルネリスからまっすぐ南下してくる道路に合流する。このAヤニ通りは最初、バタヴィア通り(Bataviasche Weg)と名付けられ、共和国独立後ジャカルタ通り(Jl Jakarta)に改名されたあと、現在のAヤニ通りになっている。

ヴィッテパアルというのは白く塗られた巨大なオベリスクを指している。バイテンゾルフ市域の境界線上に位置し、バイテンゾルフ宮殿のテラスから眺めた風景の中に目を止めるためのポイントとしてド・イーレンス総督が1839年に建てさせたという話になっている。

プムダ通りとAヤニ通りの両脇には街路樹として植えられたクナリの巨木が列をなしている。高さ20メートルにも達するほどのそれらの街路樹は1830年ごろに当時のバイテンゾルフ・ナショナルボタニカルガーデン所長だったテイスマン(Johannes Elias Teijsmann)がアンボンから取り寄せた木を植えさせたものだ。

バタヴィア通りの両脇はゴム園が作られ、バタヴィア～バイテンゾルフ間の往来が盛んになるにつれて、厩舎や馬具職人の作業所なども増えて行き、馬の放牧場や馬場も設けられた。

オランダ人が邸宅を構えるようになって道路沿いの一部が住宅エリアになったものの、ゴム園の多くは共和国独立後まで維持された。クナリの街路樹はゴム園と道路の境界を見分けるための指標になった。1935年にグッドイヤー社がタイヤ工場をプムダ通り側に開設したことで、この一帯で採集されるゴム原液は一手にそこへ流れて行くようになる。

しかし共和国独立後、ランドリフォームの名の下にゴム園は接収されて宅地化が進められ、この通りは雑然とした住宅地区へと変貌して行った。コロニアル様式の家屋が維持されているところもあるが、中には建替えるために壊されたものや、建物は維持して飲食やその他のサービス業の営業場所に変ったものなどさまざま。少なくとも、この通りを訪れたひとは古い歴史の香りを嗅ぐことができるにちがいない。[続く]

「南行き街道(11)」(2018年06月22日)

ボゴールにパリがある。ボゴール鉄道駅から西のチバロツ(Cibalok)川を越え、次のチドゥピツ(Cidepit)川の手前を北向きに並行するプリンティスクムルデカアン(Perintis Kemerdekaan)通りを北上していくと、クボンコピ(Kebon Kopi)地区の向こう側にそのパリがある。

この地区は中をスンボジャ(Semboja)通りとクナガ(Kenanga)通り、およびチュンパカ(Cempaka)通りがT字型

に分割している住宅地区で、1918年にバイテンゾルフ市庁がヨーロッパ人職員のための住宅地として建設したものだ。そこには余裕に満ちた空間に包まれているインディ様式の邸宅が、単棟と併棟を合計して46軒建っていた。

地区の中には住民用の長さ50メートル幅10メートル深さ2メートルの水泳プールも作られ、共和国になって以降にこのプールで育った水泳選手が出たこともあるらしい。プールの水源は近くの湧水が使われた。今現在、このプールは既に廃墟の態をなしている。

最初、この住宅地はすべてヨーロッパ人が住んでいたが、日本軍ジャワ島進攻が始まると住民は逃げ出し、替わってバイテンゾルフ防衛部隊に加わったグルカ兵がわずかな期間、使用したらしい。日本軍がバイテンゾルフを占領すると、このパリ地区は婦女子用俘虜収容所にされた。

パリ地区(De Staate van Parijs)と命名されたそのボゴールのパリは、高名な建築家で都市計画家でもあるトーマス・カーステン(Thomas Karsten)の設計になる。オランダ生まれのかれは第一次大戦の混乱を避けて東インド植民地に移り、スマラン・バイテンゾルフ・マディウン・マラン・バタヴィア・マグラン・バンドン・チルボン・ヨグヤカルタ・スラカルタ・プルウォクルト・パダン・メダン・バンジャルマシンで建物と街のデザインに腕をふるった。

かれは従来東インドで行われていた「ヨーロッパを植民地に植え付ける」というコンセプトを批判し、生活環境と人間工学の面から人間が採るべき姿を演じる舞台としての街設計をその視点に持ち込んだ。かれはジャワ人女性と結婚して家庭を持ち、ジャワを自分の生涯の地とすることを定めていたようだ。1942年の日本軍進攻で純血オランダ人のかれはチマヒの俘虜収容所に強制収容され、1945年にそこで没した。[続く]

「南行き街道(12)」(2018年06月25日)

1872年に東インド植民地の国有鉄道会社(Staatsspoorwagen)がバタヴィアからバイテンゾルフまで鉄道線を延長させて73年から運行を開始した。鉄道が動くようになってターミナルでのひとの往来が活発になると、バイテンゾルフの中心を成している宮殿と植物園から鉄道駅を越えて西や北西に向かう開発が進展するよう

になる。

1881年に駅舎が完成すると、鉄道線路は更に南へと伸びて行った。スカブミ〜チアンジェルを経てバンドンに向かう建設工事がスタートする。

1927年にはバタヴィア内の鉄道網電化が完了し、続いてバイテンゾルフに向けての電化工事が続けられ、バイテンゾルフに電車がやってきたのは1930年だった。

バイテンゾルフ駅舎はジュアンダ通りからまっすぐ西に4百メートルの位置にあり、駅舎の表にはバンタマーウエフに沿ってウィルヘルミナパークが作られた。この二階建ての駅舎はたいへん頑丈な作りになっていて、建設当初の状態がほとんどそのまま維持されてる。

ただし二階は従業員が怖がるため、使われていない。駅長の話によれば、従業員は二階が不気味で怖いために執務するのを嫌がる者が多かったことから、二階は使われなくなってしまったそうだ。駅長はかつて、二階で執務中に部下に憑依が起こったことを何度か体験しているという話だった。

ボゴールのパリは鉄道開通から45年後に作られた。1キロも離れていない場所がそれほど長期にわたって自然のまま残されていたという時代だ。今にして思えば、それが古き良き時代のありさまだったということなのだろう。そこからはサラツ山の威容が存分に目を楽しませてくれ、また昔は幅広く豊かな水量を誇っていたチドゥピツ川の水音が終日、通奏低音のように住民の耳の奥で鳴っていたそうだ。

既に何世代にもわたって代替わりしてきたパリ地区で、住民が改装や建替えを行ったところも少なくないものの、インディ様式建築の面影が依然として濃いエリアもある。幾分のエキゾチシズムを汲むことはまだまだできるに違いない。[続く]

「南行き街道(13)」(2018年06月26日)

ボゴールにも英雄墓地がある。植物園から南におよそ1キロ半の距離で、公式名称を Taman Makam

Pahlawan Dredet と言い、ドレデッは地名である。墓地の北側の通りがドレデッ(Dreded)通りだ。

インドネシア共和国の国体を護持するために生命を投げうった英雄たちがここに眠っている。マジョリティは1945～1949年の対オランダ闘争期の時代に没したひとびとだが、その後起こったDI/TII反乱で殉職したひとびともいる。

きわめて特徴的なのはさまざまな種族・人種が混在していることで、インドネシア共和国の生成が名実ともにビンネカトゥンガリカであったことを象徴するかのようだ。そしてその多様なひとびとがインドネシア共和国の維持のために身命を賭したのである。

地元のスダ人は言うに及ばず、バンテン人、ジャワ人、スマトラ人、東部インドネシア地方出身者、華人、インド(Indo)と呼ばれる欧亜混血者、そして日本人までもが混じっている。

1948年8月11日にボゴールで没したモハマッド・コシム・タナカ曹長、1967年に没したイブラヒム・マルヤマ中佐、ボゴールで1983年に没したトコヨダ大尉はその前スマトラで軍務に就いていたらしい。対オランダ闘争に身を投じてここに葬られている日本人はその三人だそうだ。華人はふたりで、イギリス系欧亜混血者はひとり。

イギリス系欧亜混血者ユヌス・アツマツ・マッター(Yunus Ahmad Mutter)は珍しい例のひとつだろう。かれは1928年にヨグヤカルタで生まれ、1971年に英国のニューカッスルで没した。そして愛するインドネシアに骨を埋めることを望んだのである。

かれは独立闘争期にヨグヤカルタでインドネシア共和国軍諜報部門士官として活躍した。その墓碑には、憲兵大尉・情報収集局副局長と記されている。

ふたりの華人はリー・チンイエーとニオ・ハンスイで、ふたりともDI/TII反乱の鎮圧軍一員として没している。リーはシリワギ師団軍人で1952年7月にチアンジュルで戦死。ニオは1953年11月に警察高官としてチビノンで死亡した。そのときのチビノンでの戦闘では、警察機動旅団の指揮官級のひとびとが多数戦死しており、かれらの墓碑もそこに並んでいる。

ボゴールの通り名にその名を残した英雄もここにいる。45年12月25日に没したトゥバグス・ムスリハツ(Tubagus Muslihat)大尉、そして1947年にスカブミで戦没したトレ・イスカンドル(Tole Iskandar)少尉。[続く]

「南行き街道(14)」(2018年06月27日)

1678年にVOCが建設したバタヴィア城市とメステルコルネリスを結ぶ幹線道路は、高原の町バイテンゾルフの開発のために南へと伸ばされて行った。オランダ人はその街道をドフロテザイダーウエフ(De Groote Zuiderweg)、つまり南行き街道と呼んだ。

この街道はメステルのすぐ南側にあるカンプムラユ(Kampung Melayu)から更に南のチャワン(Cawang)、そしてチリリタン(Cililitan)を抜けてクラマツジャティ(Kramat Jati)に入り、グドン(Gedong)～パサルボ(Pasar Rebo)～チブブル(Cibubur)～チマンギス(Cimanggis)～チュルッ(Curug)～チビノン(Cibinong)～クドゥンハラ(Kedunghalang)を経てボゴール市へと、まっすぐに南下している。

今の道路名で言うなら、ジャティスガラ(ジャティスガラの南縁がカンプムラユ(Kampung Melayu)地区で、そこから道路はオティスタ(Otista)通りとなってチャワンに達し、チャワンからチリリタンまではデウィサルティカ(Dewi Sartika)通りで、チリリタンを出てからボゴール街道(Jl Raya Bogor)という名でボゴールに至るのである。

現在のボゴール市の中心部にボゴール宮殿とボゴール植物園があり、そのボゴール街道が市の中心部を貫通して更に南へと通り抜けている事実は、ボゴールという町がどのようにして作られてきたのかという由来と、この街道がいかにかそのプロセスに重要な役割を果たしてきたかということについて、赤裸々に物語る歴史の生き証人であるように思われてしかたがない。

ボゴール市中心部をなすボゴール宮殿と植物園にジャカルタから下ってくるその街道は植物園の東縁を通る。一方、ボゴール宮殿の正面に北から下ってくる通りは別にあり、その街道を北上して行くとデポツの町に達する。デポツからパサルミングを経て更にスポモ通り～サハルジョ通りを越え、マンガライからメンテン地区東南角につながっていくのだが、この街道のクオリティはメステルから伸びて来るボゴール街道よりも低く、

VOCが第一級の街道として一貫的に造成した道路には見えない。

ファン・イムホフ総督のバイテンゾルフ別荘を目指してメステルから下ってくる街道が最初、別荘正面玄関まで伸びて来るものであった可能性は否定できない。後の時代になって、更に南に向けて街道を伸ばして行くに際し、バイテンゾルフ宮殿の邪魔になるのを避けて、途中で枝分かれさせたという可能性がその帰結だ。枝分かれさせた地点はバタヴィア通りの端だろう。

逆の可能性はもちろんあるのだが、そうなると最初からチアウィ村を目指して立派な街道を作り、植物園の南側から迂回してバイテンゾルフ別荘に向かうようなルートにするのは考えにくいし、同じようにバタヴィア通りを街道から分岐させて総督別荘の正面まで引いて行くのも本末転倒の感がある。[続く]

「南行き街道(15)」(2018年06月28日)

1808年にダンデルス総督が作らせた大郵便道路 (De Grote Postweg) もメステルからバイテンゾルフを経由してチアウィに向かうが、郵便物受け渡しの関係からだろう、途中のルートは異なっている。言うまでもなく、郵便という言葉が付けられてあるものの、公的文書や郵便物運送とは別に軍隊移動の迅速化が建設目的の中に含まれていたのは疑いようがない。

大郵便道路に関して言うなら、チビノンからバイテンゾルフを通過してチアウィに至るルートはバイテンゾルフ別荘に向けて作られた昔の街道にダブっている印象がある。つまりダンデルスはチアウィからチアンジュルに向けてグデパンラゴ山系の峰を突っ切るルートを作らせたとき、バタヴィア通りの端で街道を分岐させ、植物園東縁をかすめてチアウィに向かう道路を作ったのではないかというのがこの推測だ。

メステルから伸びて来た街道は植物園の東側で植物園とボゴール農大バラナンシアン(Baranangsiang)キャンパスにはさまれたバジャジャラン通りとして市内を通過した後、ラヤタジュール(Raya Tajur)通りに名を変えてチアウィ(Ciawi)の町に向かう。チアウィの町からはスカブミ街道(Jl Raya Sukabumi)として、グデパンラゴ山系を迂回しながらスカブミの町を目指すのである。

記録によれば、バイテンゾルフからスカブミに至る街道が作られたのは1813年のことで、それはつまりトー

マス・スタンフォード・ラフルズ統治下の時代だった。チアウィからグデ・パンラゴ(Gede Pangrango)山系の西を南下してチャリギン(Caringin)〜チゴンボン(Cigombong)を越え、山麓を下りきると東に向きを変えて山系南麓にあるスカブミ(Sukabumi)の町を目指すのである。そして街道は更に山系の東側にあるチアンジュル(Cianjur)へと伸びて行った。

チアウィ〜チアンジュル間は山系を迂回すれば1百キロに上るが、ブンチャツを突っ切れば50キロ強で着く。ダンデルスによる大郵便道路建設はジャワ島に画期的な交通のスピードアップをもたらした。この時期バタヴィア〜バイテンゾルフは5〜6時間の距離となり、バイテンゾルフ〜ブンチャツは4時間半で踏破できるようになる。

街道には中継所が置かれて、馬車や騎馬で通過するひとびとに便宜を提供した。距離の指標としてパール(paal)と呼ばれる杭が打たれ、杭と杭の間が1パールで、平地では6パール、山地では5パールおきが中継所の標準距離とされた。1パールは1.5キロだ。[続く]

「南行き街道(16)」(2018年6月29日)

街道沿いは最初、人気のない寂しい場所が多かったようだが、徐々に住民が増えるようになり、バタヴィアのVOC高官たちがランドハイス(英語で country house)を建てて休日に家族連れで保養に行くようになっていく。持てる者たちのそのような活動が、サービスを提供して金を得ようとする下層民を招き寄せるのは明白で、こうして街道脇に集落が作られるようになっていった。

昔の南行き街道の様子は拙作「ブンチャツ越えの道」

<http://indojocho.ciao.jp/archives/library021.html>

にも登場するので、併せてご参照いただけるにちがいない。

現在メステルという地名は東ジャカルタ市ジャティヌガラ郡の町名のひとつであるバリメステル(Bali Mester)という名前に残されている。バリという言葉が付くのは、メステルにカンブンバリがあったためだ。カンブンというのは同一種族同一文化のひとつとが集落を作って住んだ場所を意味している。それは自然発生的と言うよ

り、VOCが方針として行ったものだった。

カンブンバリはバタヴィアに移り住んだバリ人の集落だ。バリ人は奴隷としてVOCに売られたケースが大半だったらしい。1681年の人口調査でバタヴィア住民30,740人中の奴隷は15,785人おり、また1683年の調査でバリ人はバタヴィアに14,259人いたが、自由人は981人しかおらず、他はすべて奴隷だった。

1682～83年にかけてのバンテン王国スルタン・アグン・ティルタヤサ(Sultan Ageng Tirtayasa)を破滅させるための戦争に関連してVOC軍の中で目覚ましい活躍を見せたウントウン・スロパティ(Untung Suropati)中尉率いるバリ人部隊は、隊長以下全員が奴隷身分だった。この部隊の反抗と脱走は二重の意味でVOCの体面をずたずたにし、かれらを滅ぼさなければ現行制度の維持に示しがつかなくなってしまう状況に陥るのである。

当時のバリはたくさんの王国に分裂して戦争し合っていた。兵士が捕虜になれば、奴隷にされた。領民の生活も決して楽なものではなく、借金が返済できなければ奴隷にされて売り飛ばされた。「身体で払ってもらおう。」が常識だった時代だ。おまけに王も自国の領民の生殺与奪の権を握り、簡単に領民を奴隷にして売り飛ばした。金が必要になったブレレン王は1708年に750人の奴隷を船に乗せてバタヴィアのVOCに売りに来た。労働力や兵士を必要としていたVOCはそれを二つ返事で受け入れていた。

そのため、バリ人は2世紀に渡ってバタヴィア住民の中の最多数種族となっていたが、バタヴィアで諸種族と混交した結果、ブタウィ人ブタウィ文化の一要素となって溶け込んで行ったようだ。ブタウィ文化とバリ文化の関連性は意外に大きい。バリ人がよく使う動詞接尾辞の-in がブタウィ語に取り込まれたのもその一例だろう。今や-in はバハサガウルとなってヌサンタラで全国展開されている。[続く]

「南行き街道(17)」(2018年07月02日)

ラフルズ総督の時代、バリ人の若い女奴隷はひとり50～100米ドル相当の値が付いていた。男奴隷が10～30米ドル相当だったのとは大きな違いだ。最初からバリ人女奴隷はオランダ人や華人に人気が高かった。女としての見かけが良いことに加えて、家政の運営能力が高かったのが原因だ。かの女たちの中に、VOC

バタヴィア政庁の高官職に就いた欧亜混血児の母親になった者も少なくなかった。つまり、オランダ人高官のニヤイにされたわけだ。だが子供は父親に取り上げられ、オランダ人としての教育としつけが与えられた。その子にとって生母がいったい何だったのかは想像に余りあるに違いない。

ファン・デル・パッラ(Petrus Albertus Van der Parra)第29代総督の時代(1761～1775)バタヴィアには年間4千人ほどの奴隷が流れ込んできた。奴隷人口増加率が史上最大になったのがその時期だ。言うまでもなく奴隷需要が膨れ上がったのがその原因であり、奴隷をたくさん抱えることがステータスシンボルとなるという価値観がバタヴィアのすみずみまで包み込んだ時代がそれだったのである。もちろん奴隷買付人がやってきて購入品を持ち帰ることも頻繁に行われていたから、全員がバタヴィアに住み着いたわけでもないのだが。

VOCバタヴィア政庁参事会メンバーの娘で高官の妻になったコルネリア・ヨハナ・ド・ベヴェレ(Cornelia Johana de Bevere)はオランダの親類に書き送った手紙の中に、自分は59人の奴隷にかしづかれていると書いている。ご主人様が外出するときの傘持ちや扇であおぐ役、料理係、庭師役、夜の灯り役、裁縫役、靴作り役など、ひとりひとりが別々の役目を担当した。

別の記録では、1775年に第30代総督になったファン・リームスダイク(Jeremias Van Riemsdijk)は自邸に奴隷を2百人擁していた。男奴隷に女奴隷、そして奴隷たちが産んだ子供も当然奴隷であり、その人数が2百人だったということをそれは意味している。

バタヴィアの高官と家族は大勢の奴隷に囲まれて生活した。奴隷は自分の所有物であり、現代人なら自分で行うことを、可能な限り奴隷にやらせた。奴隷をたくさん持てば、自分では何もせず、自分の身の回りのことを奴隷にさせることが可能だ。自分で何もしない人間ほど偉いという価値観がここにも顔を出す。

特にご主人様が男性の場合、女奴隷はセックスの相手という役目も与えられた。華人や軍人にその傾向が高かったようだ。セックス相手が気に入らなくなれば、また奴隷市に売りに出される。自分がその女奴隷に産ませた子供までと一緒に市に立たされることも稀でなかった。カリブサール東岸の建物のひとつで、奴隷市が開かれたらしい。奴隷市では競売が行われる。高く落札されれば旧ご主人様が儲かるという寸法だ。美人で若い女奴隷に1千米ドル相当の値がついたこともあったらしい。[続く]

「南行き街道(18)」(2018年07月03日)

ご主人様の中には、女奴隷に売春させる者もあった。売春で稼いだ金はご主人様が全部取り上げた。奴隷に暴力を振るおうが、その結果死亡しようが、はたまたレープしようが、ご主人様が自分の所有物を壊したりもてあそぶだけのことだから、罪を問われることはない。それはバタヴィア政庁が公認していることでもあった。

そんな境遇に我慢できなくなった奴隷たちが脱走してブカシやカラワンに隠れ住むことも頻発した。逃亡奴隷はまともな仕事に就くことができないため、犯罪行為で生きて行く道しか残されていない。

脱走ならまだしも、始末に負えないのは奴隷の反抗だった。反抗的な奴隷への仕置きには暴力が使われた。暴力を振るいたくないご主人様は法執行人(balyaw)を雇って行かせた。

それでも効き目がない場合、ご主人様は裁判所に許可を求めて、反抗者に鉄鎖を結び付けたり、独房に閉じ込めたりした。反抗者が恭順するまで、何年間もそれが続けられたようなことも起こっている。

最初クーンがジャヤカルタの町を奪ってVOCの根拠地にしたとき、運河が縦横に走るオランダ風の街作りが始まった。その実行には巨大な労働力が必要だった。マルクのバンダ島占有はスパイス獲得に大きく貢献し、加えてオランダ人に反抗するバンダの男たちを奴隷にしてバタヴィアに移し、街の建設に貢献させた。

ヌサンタラのあちこちでVOCが経済利権の奪取のために地元支配者と戦争し、敗れた地元側の捕虜は奴隷としてバタヴィアに送り込まれた。

いや、ヌサンタラの外でさえも、1641年にポルトガルがアジア経営の根拠地にしていたマラッカを陥落させて、ポルトガル系メスティーソを奴隷にし、バタヴィアに連れて来た。インドのマラバールやコロマンデルなどのポルトガル基地や、スリランカなどでも同じことが起こった。

ポルトガル系メスティーソのカンプンは北ジャカルタ市チリンチンのトゥグ(Tugu)村だ。そんなかれらが伝え残してきた音楽芸能クロンチョントゥグ(Keroncong Tugu)は南国風の軽やかなリズムの陰に、そこはかかない

憂愁を漂わせている。

連れて来られた当初は奴隷身分だったメスティーソに、1661年、カソリックからプロテスタントに改宗するなら奴隷身分から解放されるという政策が施された。解放奴隷はマーダイカー(mardijker)と呼ばれ、インドネシア語メルデカ(merdeka)の語源になったとされている。奴隷制度廃止の法律化が確定した1814年、バタヴィア住民人口47,217人中に14,239人の奴隷が含まれていた。実質的な意味でヌサントラの全土から奴隷が姿を消すのは、それから数十年経過して19世紀後半に入ったあたりのことになった。[続く]

「南行き街道(19)」(2018年07月04日)

バタヴィアで一番古いカンブンバリはメステルのもので、1667年がその縁起になっている。次に古いのがアンケ(Angke)のカンブンバリで、1709年にイ・グスティ・クトゥツ・バドウル(I Gusti Ketut Badulu)を頭領とする集団が住み着いた。そのために別名カンブングスティという名前で人口に膾炙している。アンケにはカンブンブギスもあって、それらは隣り合わせだった。このカンブンをひとびとはカンブンバリと呼ばず、カンブングステイを通称としたらしい。

もうひとつのカンブンバリは中央ジャカルタ市ガジャマダ通り西側のクルクツ(Krukut)地区で、こちらは始まりが1777年である由。クルクツ地区のカンブンバリはライニール・ド・クレーク(Reinier de Klerk)第31代総督がモーレンフリートウエストの自分の私有地に1760年に設けた別荘南側に隣接していた。その別荘は今、国立公文書館(Gedung Arsip Narsional)と呼ばれており、展示会場や結婚式の貸し出しなどに使われている。現在のインドネシア共和国公文書館は南ジャカルタ市アンペララヤ(Ampera Raya)通りに最新設備を完備したビルになって建てられている。どうやら、国立公文書館と同じようなヴィラ形態の歴史的由緒を持つ豪壮な建物がそこから南側にあまり見られない理由が、そのあたりの事情から推測されてくる。さて、メステルコルネリスにあるカンブンバリの南側には、ムラユ人のカンブンが作られた。今のカンブンムラユがそれだ。ここでムラユと言っているのは当時のマラッカ半島、現在のマレー半島で主流を占めたひとびとで、同一文化圏としてスマトラ島北部・マレー半島北部(タイ領の一部)シンガポールなどの島々からひとびとはカンブンムラユにやって来た。

かれらは17世紀後半にバタヴィアに移住して1656年にそこを開いたようだ。VOCバタヴィア政庁は華人やインド人あるいはアラブ人、そしてバリ・マカッサル・ブギス・ムラユ・ジャワなどの諸種族が種族と文化に従って作るコミュニティに自治権を与え、統率者を指名してその者に全責任を負わせるカピタン(Kapitan)制度

を設けた。コミュニティの規模が拡大するとカピタンの下にマヨール(Mayor)更にレトナン(Letnan)という下級統率者が置かれるようになっていった。

この制度が最後まで明瞭に残されたのが華人をはじめとする外来人社会であり、プリブミの諸種族はたいがいが地元民と交じり合っただけで地元社会に溶け込んで行く状況を呈した。

[続く]

「南行き街道(20)」(2018年07月05日)

カンブムラユの初代カピタンはワン・アブドゥル・バグス(Wan Abdul Bagus)だ。かれはンチェ・バグスの息子で、タイ南部のパタニで生まれた。頭脳明晰で実生活でも機敏で果敢な行動を示す優秀さが人口に膾炙し、大勢の追従者がおのずとかれの下に集まって来た。その時代、すべての男は戦闘要員であり、男の実生活というのは戦闘や闘争が主要な人生舞台だったことは世界中ほとんど変わらないだろう。かれが自分の軍団を引き連れてVOCの戦闘部隊となるためにバタヴィアへやってきたことはおおいに推察しうるものだ。

かれは最初、バタヴィア政庁で事務職となり、優秀さが認められて通訳や対外折衝、さらには公式使節となって派遣されるほどの地位を得る。バンテンのスルタン・アグン・ティルタヤサとの戦争、トルノジョヨの叛乱鎮圧戦、カピタンヨンケル(Kapitan Jonker)叛乱鎮圧戦などにかれはムラユ人軍団を従えて参加した。

老齢になったかれをVOCは西スマトラ鎮撫のための公式使節に任命している。

1661年にはカンブムラユの地がかれの私有地と認められ、1696年には更に広がったムラユ族の土地が再度かれの私有地として認められたようだ。

カンブムラユから1.5キロほど南にチャワン(Cawang)がある。チャワンという言葉の響きから「茶碗」の文字を想像するひとがいるかもしれない。その茶碗も中国語に由来するインドネシア語として認められているのだが、綴りは cawan であり、語尾の響きの違いを聞き取れるひとはあまり多くないようだ。

ちなみにインドネシア語 cawan の語義は1. 持ち手(把手)のないコップ、2. 飯などを食べる器、3. コップの下に敷くもの、という語義になっている。日本でも元々は茶を飲むための器として中国から渡来したために

茶碗という名称で定着したものの、その後さまざまな用途に使われるようになって、飯を食べるときの器は飯茶碗という奇妙な呼び方が使われたり、飯碗というロジカルな名称も出現し、大混乱の果てに茶碗で飯を食べるという表現に絞られて現代につながっている。

その一方で、湯呑という名称の器があり、この湯を飲むという言葉がついている容器で茶を飲むという奇妙奇天烈なことをしているのが日本人だということになりそうだ。湯呑は湯茶を飲むためのものであるとか、湯呑茶碗の略語だから云々を言うひともあるが、本当の湯を飲む人は少なく、ほとんどが茶をそれで飲んでいるのだから、茶飲み茶碗のほうがはるかに自然であるように感じられる。

慣習の力というのはまるで強権独裁者のようなものだ。いや、強権独裁者にもそこまでの力はあるまい。そればかりか、「前例はすべて正しいのか？」という素朴な疑問がここにも湧いてくるのである。それを人間の弱点と見るか、それとも生来的な地だとするかによって、そのひとの宇宙観・歴史観が決まってくるように思える。閑話休題。[続く]

「南往き街道(21)」(2018年07月06日)

もう少し戯言を続けると、インドネシア語の/w/の文字は、時に/b/の異音として使われた。次のような言葉にその例を見ることができる。

wulu ⇒ bulu, wesi ⇒ besi, watu ⇒ batu, uwi ⇒ ubi

もしこれが Cawang に応用できるものであるなら、現代インドネシア語の cabang という言葉が浮かび上がってくる。確かにこのチャワン地区で道路は分岐し、近辺の川も枝分かれているようだから、語源をそこにたどることもできそうなのだが、歴史家は違うと言う。

カンブンムラユはこのチャワン地区まで伸びていて、そこに作られたムラユ人コミュニティを統率したレトナムムラユのンチ・アワン(Enci Awang)がチャワンの語源なのだそうだ。ンチアワンがチャワンとなったという説は確かに説得力がある。

メステルからカンブンムラユを通してチャワンに至る道路は現在オティスタ通り(Jl OTto ISkandar dinaTA = Jl OTISTA)となっているが、この道路沿いの地域はジャカルタの街中で都市化が早く進行したエリアだった。歴史家の談によれば、1960年代でさえ、ジャカルタの中で都市化したエリアは限られていて、他は地方の農村をそのまま移してきたようなカンブンあるいは無人の原野ばかりだったらしい。

カンブンの住民は自分が都市の一部であるという意識をほとんど持っていない。ジャカルタでかれらは田舎の生活習慣と社会行動をそのまま継続していた。だからジャカルタが巨大カンブン(kampung raksasa)であるという表現は比較的最近まで続いていた。

カンブン(kampung)の語源はポルトガル語の campo であるというのがほぼ定説になっている。昔はカンボン(kampong)と綴られてそう読まれることもあった。今でも?時折、カンボンという発音を耳にすることもある。

その定説が当たっているなら、ひとつのカリカチュアが浮かび上がってくる。石造りの巨大堅固な要塞に住んでいるポルトガル人が要塞の外を取り巻いている原野をカンポと呼び、原野の中に点在する陋屋の集まった集落を指さしてカンポの民と呼んだことはあっただろう。それを耳にした原住民が、ポルトガル人は集落のことをカンボンと呼んでいると理解して、その言葉を広めたであろうことが想像されるのである。

1960年代に都市化の進んでいたジャカルタ市内エリアは、カリブサール両岸の旧バタヴィア地区、グロドッ地区、ガンビル地区、ジャティヌガラ地区からオティスタ通り沿いの一部、メンテン地区、クバヨランバル地区がそのすべてだったそうだ。わたしも70年代前半にオティスタ通りをよく通過し、そこに住んでいたひとを訪ねたこともあったが、当時わたしがジャカルタの中心部と思い込んでいたガンビル～メンテンにかけてのエリアから離れたこんな場所が意外に充実した地区であることを知って、驚いた経験がある。[続く]

「南行き街道(22)」(2018年07月09日)

チャワンの南はチリリタン(Cililitan)だ。都内環状道路を超えたところからデウィサルティカ通りはチリリタンのPGC(チリリタン卸売市場)三叉路まで来てボゴール街道にバトンタッチする。

チリリタン村は元々東のチピナン川と西のチリウン川にはさまれたエリアで、チピナン川の支流にチリリタン

と呼ばれる川があった。川沿いにリリタンクトゥ(lilitan kutu)と呼ばれるイラクサ科の木質植物で、学名を *Pipturus velutinus* Wedd.と称するものが大量に生えていたことが川の名前の由来であり、それが地域名称となった。

18世紀半ばごろには、チリタン一帯はピーテル・ファン・デ・フェルデ(Pieter van de Velde)が私有地にした広大な土地の一部をなしていた。1740年10月8～10日に起こった華人暴動とVOC側の華人大殺戮事件の責任を問われてカピタンチナのニー・フーコン(Ni Hoe Kong)がアンボイナに流刑されたとき、ニー・フーコンの持っていたメステルの南側に散らばる土地をファン・デ・フェルデが手に入れた。そのあとかれは1750年ごろ、自分の所有地をひとつにまとめようとして、周辺の土地を買い集めて広大な広さを持つ私有地を作り上げたのである。

タンジュンオースト(Tandjoeng Oost)と呼ばれたその私有地は、西はタンジュンバラツ(Tanjung Barat)からクラマジヤティに至る広範な土地をカバーしていた。タンジュンオーストという名称は現在タンジュンティムール(Tanjung Timur)というインドネシア語の形で、古い地名として使われているだけのようだ。タンジュンバラツが町名として存在し、道路名称にも使われているのと対照的な扱いになっている。

ピーテル・ファン・デ・フェルデはその土地をアドリアン・ジュベル(Adrian Jubels)に売却し、この二代目地主の没後、1763年にヤコブス・ヨハネス・クラアン(Jacobus Johannes Craan)がそれを買った。クラアンが亡くなるとその土地は娘婿のウィレム・フィンセンツ・エルヴェシウス・ファン・リームスデイク(Willem Vincent Helvetius van Riemsdijk)に引き継がれた。この婿はジェレミアス・ファン・リームスデイク第30代総督の息子である。その後、この家系はタンジュンオーストに建てた大邸宅に代々住んで、第二次大戦の日本軍進攻を迎えることになる。

ウィレム・フィンセンツ・エルヴェシウスは17歳でオンルスト島の行政官に就任するほどの処世に長けた人物で、その裏に父親の威光が輝いていたことは言うまでもないのだが、諸方面から金があがりながら集まってくるというオンルスト島をはじめ、あれこれの関連から集めた膨大な資金力で、かれはタナアバン、チビノン、チマンギス、チアンペア(Ciampea)、チブンブラン(Cibungbulan)、サデン(Sadeng)などに土地を持つ大地主となった。タンジュンオーストが著しい経済発展を示したのは当然の帰結だ。

ウィレム・フィンセンツの息子のダニエル・コルネリウス・エルベシウス(Daniel Cornelius Helvetius)はタンジュンオーストの広大な土地を農業と牧畜のセンターにしようと考えてその計画を推進し、娘のディナ・コルネリア(Dina Cornelia)の夫チャリン・アメント(Tjalling Ament)は1860年から舅の遺志を継いでその地を6千頭の乳牛を養う大牧場に育て上げた。タンジュンオースト私有地をオランダ人はフルンフェルド(Groeneveld)と呼んでいたことから、19世紀後半の時代にバタヴィア住民の間でフルンフェルド牛乳の名を知らない者はいなかったらしい。[続く]

「南行き街道(23)」(2018年07月10日)

1775年にヘンドリック・ラウレンス・ファン・デル・クラップ(Hendrik Laurens van der Crap)がチリリタンに建てたカントリーハウスがある。250年近い歳月を乗り越えて現代にまで残されているその大邸宅は、クラマツジャティの警察病院の裏手にあり、老朽化して目を覆いたくなるほどの惨状だ。

9百平米の長方形の床を持つ建物は二階建てで、一階と二階にそれぞれ多数の部屋を持ち、壁には15の扉と12の窓を見ることができる。二階に上る階段の壁には「Hendrik L Van der Crap 1775」の文字がくっきりと残されている。

チリリタンの家(Rumah Cililitan)と呼ばれているその邸宅に関するインドネシア語情報を読むと、タンジュンオースト私有地は何人もの地主が交替したあげく、当時バタヴィアの実業家で大富豪のひとりだった、ヘンドリック・ラウレンス・ファン・デル・クラップ(Hendrik Laurens van der Crap)が手に入れた、と書かれている。

かれはカンブンマカッサルで農園を開き、1775年にカントリーハウスを建てて、毎週末家族を連れて保養に来るという使い方をしていたようだ。当時のバタヴィアは城壁に囲まれたカリブサールの両岸一帯であり、かれらはそこの自邸から2~4頭だての馬車でジャヤカルタ通りを抜けてグヌンサハリ通りを下り、メステルをも超えてはるかに草深いチリリタンまでやってきていたということらしい。

18世紀から19世紀半ばごろの時代、チリリタン~クラマツジャティ~タンジュンバラッ~チジャントウン一帯にかけては、オランダ人があちこちにカントリーハウスを建てて保養に来ていた。現代の首都圏住民がブンチャッへ保養に行くようなことが、数百年前は旧バタヴィアの城壁の中からチリリタン一帯へ遊びに出かけていく

形で行われていたということなのだろう。

最後のオーナーは1925年にその大邸宅をバタヴィア政庁に売った。日本軍政期には日本軍が接收してそこを兵器庫に使っていたそうだ。別の説によれば、カンブンマカッサルに作られた捕虜収容キャンプ司令官タナカ大尉がそこを宿舎にしていたという説明もある。

いまは国家警察の資産となっていて、その建物は国家警察職員家族寮として使われており、18家族が家賃を払って住んでいる。だが建物内の大広間に住む者はおらず、近隣に住む古老によれば、そこは異界との接点になっているため異界の者がよく出没しており、その不気味さに耐えてそこに住もうと思う警察職員家族はいない、との話だ。古老はまた、かつてヴィラノヴァ(Villa Nova)と呼ばれていたこのカントリーハウスを建てたファン・デル・クラップはVOCの軍人であり、海賊活動で巨大な富を築いたとも物語っている。[続く]

「南行き街道(24)」(2018年07月11日)

1920年代初めごろに、チリタンにバタヴィア最初の飛行場が設けられた。オランダ領東インドで最初の飛行場は1914年にオープンしたスバン(Subang)のカリジャティ(Kalijati)飛行場であり、チリタンではない。

チリタン飛行場の使用がいつから開始されたのかは記録がないためによくわからないが、フォッカー機によるアムステルダムからバタヴィアへの初飛行が1924年11月に行われているので、1920年代初めごろではないかと目されている。そのときの飛行は途中で墜落事故が起こったことから、55日かけてやっとバタヴィアのチリタンに到着した。

第二回トライアルは2017年10月で、このときは10日間でバタヴィアまで飛来した。

もう一度トライアルが行われた上でKLMはオランダ～バタヴィア～オーストラリアという旅客輸送ルートを作って活動を開始する。

1940年にウエルテフレーデンからほど近いクマヨランに国際空港が設けられるまで、チリタン飛行場はオランダ植民地政府の空軍基地および民間商業フライトの空港として機能した。共和国独立後はハリムプルダナクスマ空港と名が変わり、インドネシア空軍の基地としての地位を保っているが、民間商業フライトの空港

としての働きも兼ねていて、オランダ時代と似たようなことが続けられている。

チリリタン飛行場については、拙作「ジャカルタ国際空港史」にも記載があるので、併せてご参照いただければ幸甚です。<http://indojoho.ciao.jp/koreg/libdrajkt.html>

警察病院から3キロほどボゴール街道を南下すると、クラマツジャティ中央市場(Pasar Induk Kramat Jati)がある。生鮮野菜と生鮮果実のための中央市場の建設が開始されたのは1972年のことだ。総面積14.7Haの巨大な市場が完成して1974年2月3日に活動が開始された。

東南アジア最大の市場のひとつと言われているクラマツジャティ中央市場には、全国からありとあらゆる野菜と果実が集まってくる。スパイスもちろんその一部であり、希少種や消費量がとても採算に合わないようなものすら、この市場内を探せば必ず見つかる、と言われている。

ここは首都圏の中央卸売市場の機能を持ち、全国各地から集まってくる野菜や果実がいったん集積され、それが首都圏各所にある在来市場に散っていく流れのハブの位置を占めている。流通機能上は卸売りときられていても、個人消費者が買いにくるのを拒む姿勢はゼロだ。インドネシアではいくら卸売りという看板を掲げていようとも行われているのは数量割引システムに他ならない。要するに、大量に買えば単価が廉くなり、少量しか買わないなら単価は高くなる、という原理がそれである。購入者に資格的な制限を設けて差別するようなスタイルを執らないところがインドネシアらしさと言えるかもしれない。[続く]

「南行き街道(25)」(2018年07月12日)

2016年8月8日付けコンパス紙によれば、クラマツジャティ中央市場が歩んできた沿革が次のように説明されている。

1972年12月	市場建設工事開始
1974年2月3日	市場の稼働開始
1977年	市場内商活動に対して関連諸方面がかけてくる徴集金に市場内テナント商人の苦

	情が高まる
1979年4月	全国から野菜果実を運んでくるトラックの到着台数が顕著に低下していることを、テナント商人らが都知事に陳情
1981年11月	オランダ政府の援助で、野菜30トンを保存できる冷蔵室が稼働を始める
1980～86年	たくさんの売場が空き家になり、浮浪者が集まって来てねぐらにするようになる。犯罪が多発し、殺人事件さえ起こり、商業センター機能は風前の灯火となって、傷んだ建物は修理されず、周辺道路もぬかるみとなるという暗黒の時代。
1987年12月	市場の大改装が開始された。市場建物は三階建てとなり、映画館や子供遊園地も併設される。
1989年12月	大改装工事が完了。
1990～94年	市場運営が混乱。排水管が詰まったまま放置され、市場ゴミの回収もおざなりにされ、道路の補修もなされず、無許可売場が構内に林立。
1994年6月25日	野菜スパイスコーナーであるブロックCで火災。テナント商人らに6億ルピア超の損害が発生。
2002年2月24日	バンテンとマドゥラの両商人グループ間で、商勢を奪い合うための暴力衝突が活発化。世の中で怖れられているマドゥラ人が金をたかりに来るのをバンテン人が嫌悪したのがその発端。地域リーダー協議会の調停で双方が和解。
2003年1月	市場補修改装工事。
2005年7月2日	売場1Gと合同売場で電線ショートによる火災。
2005年11月	市場表の道路脇を埋め尽くすカキリマ商人への統制活動。
2015年8月	商業省の消費物品物価安定プロジェクト対象パサルのひとつとして、物価乱高下防止の観点から監視と対処のシステムが設営される。
2015年末	市場建物補修工事が一年がかりの計画でスタート。
	[続く]

「南往き街道(26)」(2018年07月13日)

市場内では、取扱商品がそれぞれ一括りにされて独自のゾーンを形成している。どのようなゾーン建てに

なっているのかを知れば、市場内のありさまを想像でなりとも知ることができそうだ。ゾーン建ては次の通り。

とうがらし cabai

バワン bawang

その他野菜 sayuran

芋類 umbi

バナナ pisang

パイナップル nanas

アボガド avokad

すいか semangka

その他果実 buah

スパイス bumbu

言うまでもなく、市場建物内に入荷した商品を選別したり小分けするためのゾーンも設けられている。

総面積14.7Ha、売場4,508カ所、24時間稼働のクラマジヤティ中央市場にはかつて、はるかに小さい在来市場がそこに存在していた。もっと北にあるパサルアタス(Pasar Atas)と呼ばれた在来市場に対比させてパサルバワ(Pasar Bawah)と呼ばれていたことから、今の中央市場をパサルバワと呼ぶ人もいまだにいる。

そこに生鮮野菜や果実の中央市場が設けられたのは、それまでその機能を果たしていたマンガライ市場がもはや手一杯になり、生鮮野菜果実の売場が道路上まであふれて地区一帯を大混雑の渦に巻き込むようになったためで、そのありさまは1969年5月のコンパ紙に報道されている。

とうがらしゾーンに売場を持っているヤディさん51歳は、高校生のころから父親を手伝ってここで商売していたと語る。

「80年代に父はここで商売していました。わたしは最初ここで販売するための唐辛子を自分で仕入れに行くため、トラックの運転手をしました。市場に巣食うプレマンに一目置かせるために、若いころは毎日気張ってましたよ。仕入れだってそうです。他人を安易に信用したら、とんでもない目に遭わされる。産地の販売者が送ってくれるという約束なんか、当てになりません。自分で取りに行くのが一番確実だったんです。昔、父親の時代は鉄道便で送られてくる二袋で商売していました。今じゃトラックで毎日4.

5トンが届きます。」

[続く]

「南往き街道(27)」(2018年07月16日)

東ジャカルタ市チピナン(Cipinang)のコメ中央市場には、床にこぼれたコメを拾い集め、それを売れる形にし直して再販する人間がいる。貧困層の人間で、収入の道をあれこれ求める者の中に、そういう作業をなりわいの種にする者が出現するのだ。そしてクラマツジャティ中央市場とて、その例外ではないのである。

運搬途中で床に落ちた品物、腐ったり、あるいは汚れで売物にできないと店主が判断したためにゴミ捨て場に捨てられた品物でも、腐敗部分や汚れ・変色をていねいに取り去れば、半分くらいは使用に耐える品物がけっこうある。かれらはその作業を行うのである。アトゥンさん47歳は中部ジャワ州ドゥマツ(Demak)から17歳のときジャカルタに出て来て、それ以来30年間そのビジネスを続けている。

かの女は再販できそうなあらゆる物を拾い集める。そしてきれいにしてから、それを種類別に小袋に詰める。たとえばほぼ1キロ近い玉ねぎを一袋2万ルピアで販売する。正規商人の売場では相場キロ当たり2万8千ルピア。

かの女のこの商売による収入はひと月350万ルピア。最低賃金よりも高い。住居費とひと月の生活費はそれで賄えて、おまけに二週間に一度帰省するための長距離列車代金もそこから出せる。夫が故郷で百姓しているから、二週間に一度は帰省するのだそうだ。

一方、赤バワンの皮むきを仕事にしているスカルティさん50歳は、毎日12時間、コンクリートの床に座って作業する。百キロ分の作業をして賃金7万ルピアが手に入る。百キロを片付けるために12時間かかるというわけだ。それを毎日繰り返して手に入る月収はやっと210万ルピア。

クラマツジャティ中央市場は単なる経済活動の場というものではない。そして物資流通の

仕組みを支えている機能だけが運動しているというものでもない。そこには、それらとは直接的な関りを持たず、またマクロな機能とは無縁の多数のひとびとがその場に頼って生きている、そういうありさまを映し出し

ているスクリーンでもあるのだ。

先進国には見当たらないアトゥンさんのような商売がどうして成り立ちうるのか、はたまた先進国と発展途上国を区分する境界線がそこにあるのだという見方が当を得ているものなのかどうか、更にそのような商売がなくなるのが先進国の指標であるかのような評価が正しいのかどうか。先進国とは経済面における評価指標であるというものの見方を人間開発面におけるものに入れ替えた時、先進国という言葉はきっと思想革命を引き起こすものになりかねないのではあるまいか。[続く]

「南往き街道(28)」(2018年07月17日)

東ジャカルタ市クラマツジャティ郡の中にチョンデッ(Condet)地区がある。チョンデッ地区はチョンデッラヤ通りが通っているエリアで、バレカンバン(Bale Kambang)町・バトゥアンパル(Batu Ampar)町・グドン(Gedong)町の三町から成っている。チョンデッが行政区画名称になっていないとはいえ、先史時代から人類が居住していたエリアであり、その古さのゆえに知名度の高い名称になっている。

この地区からは、紀元前1千～1千5百年ごろと見られる石器の斧やのみ、ドリルなどが発見され、別の調査では銅器も見つかっている。更に町名になっているバレカンバンとは王の保養所、バトゥアンパルは生贄を捧げるための平で大きな石を意味しており、この土地がただの原野でなかったことをそれらが示しているようだ。

チョンデッという言葉の由来はチリウン川支流のチオンデッ(Ci Ondet)川から来ているようで、オンデッそのものの意味は五月茶という木の名称だ。

チョンデッの地名が最初に記された古文書は、第18代総督に就任する直前の1709年9月24日にアブラハム・ファン・リーベーク(Abraham van Riebeeck)が書き残した記録で、「パルンコンバレ・バトゥジャヤ・デポツ・スリンシンなどのわが所有地を通過して、チオンデッ川の上流に向かう。」という記載が見られる。

更にスルタン・アグン・ティルタヤサの王子パゲラン・プルバヤが最終流刑地のインドのナガパッサムに出

発する際に残した遺言状には、「チョンデッにあるわが所有の家と水牛を、残して行く妻と子供に贈与する。」と書かれており、1716年4月25日付けでオランダ人公証人がその遺言状に公正証明を与えている。

1753年6月8日付けのバタヴィア総督決定書には、タンジュンオースト私有地の一部をなすチョンデッの土地816モルヘン(およそ5万2千ヘクタール)を8百リンギッでディーデリック・ウイレム・フレイヤー(Diederik Willem Freijer)に売却する、という文章が見られる。

チョンデッラヤ通り南詰のTBシマトウパン通り(Jl TB Simatupang)三叉路から5百メートルほど北上したチョンデッラヤ通り55番地にある首都軍管区基幹連隊演習司令部(Markas Latihan Rindam Kodam Jaya)の向かいに、昔はさぞ権勢を誇ったであろうと思われる屋敷がある。

1756年にバタヴィア参事会メンバーのフィンセンツ・リームスデイクが農園を設け、カントリーハウスを建てて保養に使った。そのカントリーハウスがこのタンジュンティムールの家(Rumah Tanjung Timur)と呼ばれている屋敷だ。タンジュンティムールの家という表現はかつてオランダ人が呼んだタンジュンオーストハイス(Tandjong-Oost Huis)に由来しており、別名フルンフェルドハイスとも言う。[続く]

「南行き街道(29)」(2018年07月18日)

チョンデッの南にあるグドン(Gedong)という地名はグドゥン(Gedung=建物)の古い発音で、石やセメントで作られた豪壮な恒久的建物を指す言葉だった。現代ならビルを指して使われている言葉だが、高層ビルなど影も形もなかった時代には、吹けば飛ぶような陋屋の合間に出現した平屋やせいぜい三階建ての大邸宅がグドンの名で呼ばれた。「お屋敷」という言葉がその訳語にふさわしい時代の話だ。今でもそのグドゥンという標準形をグドンと発音するひともある。

この種の音韻変化は口承文化で容易に起こる。外国語を文字で学ぶことが習慣化している日本人は、単語の文字が一字異なっていれば別のものであるという理解が普通になっているため、インドネシア語のような口承文化を基盤に置く言語の学習者にとって難しい要素となっているが、要は自分の常識を変えればよいだけの話であるとも言える。

benar が bener と書かれているのに直面すると、辞書にない言葉だとして理解を諦めてしまうひとが見受けられるのだが、インドネシア人の間で生活してみると、かれらがブナールと発音するべき時にブヌールという発音をしているケースに頻繁に出会う。そのブヌールという音が文字化されたときに、bener という表記になって出現するのである。

特に/a/の音は弱母音化して/e/に変化する傾向が顕著で、これはムラユ語が持っている特徴だろうと思われるのだが、この意味からも、インドネシア語の学習というのはインドネシア語による生活体験によって完成していく傾向の強い言語だと言えそうだ。その点を取り上げるなら、日本語も実は同じような特徴を持っているとわたしは見ている。

日本人も音韻変化を好んで行う民族であり、日本語を学びたい外国人の多くが文字から日本語を学んでいるのだが、それだけではなかなか完成度が高まらないだろうというのがわたしの直観だ。ところが日本人が日本人自らのために確立させた(あるいは慣習化させたと言うべきか)外国語学習方法は固有の体質と異なる性格のものになっているのである。

インドネシア語をそのメソッドに載せた場合、あまり効率的でない面がポロポロとこぼれ落ちてくるだろう、ということをわたしは主張している。[続く]

「南往き街道(30)」(2018年07月19日)

さて、グドン地区の語源となったその「お屋敷」がヴィラノヴァと呼ばれた地主の大邸宅だったという説明がある。

リームスデイクのカントリーハウスが当時はそのグドン地区における唯一の「お屋敷」であったことから、フルンフェルドにあるプリブミ集落はカンピングドンと呼ばれ、それが現在グドン町という公式行政区名称として残っているのだそうだ。カンピングドンという名の集落もいまだに存在している。

バイテンゾルフとバタヴィアを往復する総督や高官たちが、往来途上でヴィラノヴァに立ち寄っていたことを示す記録がたくさん残っている。ただ、ファン・デル・クラップのカントリーハウスの話でちょっと触れたように、ヴィラノヴァが「チリタンの家」だったのか、それとも「フルンフェルドの家」のどちらのカントリーハウスだったのかということに関して、インドネシア語情報の中に少々混乱が見受けられるように思われる。

ある記事では、レディ・ロリンソンというイギリス貴族が地主として住んでいるチリタンの家がヴィラノヴァだと述べている一方、別の記事ではチョンデツ住民に苛斂誅求を課した地主が住んでいるタンジュンオーストの家がヴィラノヴァだったと書かれている。

この後で物語る予定のントン・グンドウツ(Entong Gendut)の叛乱を読めば、ある程度の筋道は立つような気がするのだが、それですら、それらの情報からだけではヴィラノヴァがどちらのカントリーハウスだったのかを断定する確証は手に入らない。

総督や高官たちが両方に立ち寄っていた可能性もちろんあってしかるべきだが、両方がヴィラノヴァと呼ばれていたはずがないし、1733年から1750年までバンテンスルタン国の王位に就いたスルタン・ムハンマツ・シファ・ザイヌラリフィン(Sultan Muhammad Syifa Zainularifin)の王妃で、その後継者指名の争いに影響力を振るったシャリファ・ファティマ(Syarifah Fatimah)がVOCのバックアップを得ようとして1749年に時の総督ファン・イムホフとの秘密会見をヴィラノヴァで行ったという話も、その混乱に拍車をかけるような内容になっている。その両カントリーハウスが作られたと言われている年と比べてみるなら、更に別の候補者が躍り出て来そうな気配が立ち昇るではないか。

そのスルタン位継承の争いは1750年にキヤイ・タパの起こした争乱となって結実している。才色兼備を謳われたシャリファ・ファティマ自身もその争乱の責を問われてスリブ群島のエダム島に流刑され、流刑先で没した。[続く]

「南行き街道(31)」(2018年07月20日)

昔から、バタヴィアのブタウィ人カンブンにはたいていひとりから数人のウラマ(ulama)とジャゴアン(jagoan)

がいた。ウラマは住民の暮らしに宗教の教えをもたらして部落内での生活規範や徳目を指導する役割を担い、ジャゴアンは戦闘能力の高い人間が就いて武による部落内の秩序維持と外敵から部落を防衛する機能を担った。

ジャゴアンというのは雄鶏を意味するジャゴ(jago)の派生語で、喧嘩に優れた猛者、ブンチャッシラッの使い手、三牲(福建語で samseng, gangster, mafia, yakuza などの類語としてムラユ語に入っている)などの語義になっている。日本文化ではニワトリそのものに男の美德をほとんど見出していないようだが、闘鶏や軍鶏、凄烈に時(鬨)を告げる鳴き声などに関連してコックを雄鶏と人間男性を結びつけるものとして扱っている文化もある。インドネシアのこの観念は果たしてヨーロッパからもたらされたものだったのかどうか？

もうひとつ、インドネシア語の接尾辞-an には名詞に付いてそれによく似たもどきのものという意味をもたらす機能があることから、ひとによっては男の中の男という意味でジャゴを使い、それに劣る見てくれだけの男をジャゴアンと呼ぶケースもあるのだが、わたしはジャゴはあくまでも雄鶏であって雄鶏のような男だからジャゴアンと呼ばれるというロジックに従おうと思うので、ジャゴアンの語を統一的に使いたい。

そうなると英雄も卑怯者もみんなジャゴアンになってしまうが、これは仕方ない。ブンチャッシラッの使い手なら一様にジャゴアンと呼ぶことにする。

もちろんジャゴアンも部落民のひとりなのだから、ウラマの教えに服するのは当然のことである。文武に長けたジャゴアンは信仰心も篤く、徳をもって敵を制する英傑としてブタウィ全域にその名を知られた人物も多数出現した。もちろん中には喧嘩が強いだけで人格は？という人間も少なくなかった。

バン・サミウンに頼まれてニヤイ・ダシマを殺害したバン・ポアサはカンブンクウィタンのジャゴアンだった。かれのダシマ殺害論理は異教徒に身を売った倫理に背くムスリマを肅清するのがイスラムの善であるというものの見方であり、その肅清を自分が実行することで徳が上積みされるということだったようだ。その情念は一般ムスリム界に受け入れられやすかったと見えて、インドネシア民衆の民族意識高揚期にかれは民族主義英雄のひとりに祭り上げられている。

カンブンにおけるそのような体制は1950年代ごろまで続けられた。60年代以降、都市建設のためのカン

ブン移転が始まるようになって、土着の伝統的な体制が徐々に変化していくようになる。

ニヤイダシマの物語はこちらをご参照ください。

<http://indojoho.ciao.jp/archives/library010.html>

[続く]

「南往き街道(32)」(2018年07月23日)

ジャゴアンというのは男一匹であり、たいていがブンチャッシラツ(pencak silat)の使い手で、刃物を使う格闘技もお手のものだった。歴史家アルウィ・シャハブ氏はジャゴアンに関して、次のように説明している。

卑怯なふるまいは男の恥であり、言行一致が本領で、他人から挑戦されたら必ず受けて立つのが真のジャゴアンだった。その心意気を示す警句が「lu jual, gue beli」(売るのはおめえで、買うのはオレだ)であり、自分は売る側に回らないが、売られたなら背を向けることはせず、勝つか負けるかを競い合う。並大抵のことで刃物(普通は golok と呼ばれる鉞)は鞘から抜かないものの、一度抜いたらそれが血塗られずにはおかない。

そのためかれらの愛用する鉞をかれらは神聖視するようになり、日本の武士にとっての日本刀のような精神性が発現したことは興味深い。鉞を持ちまわるのは体面なのであり、それを鞘から抜かないのが上策だという思想だ。氏の説明に戻る。

「罵詈雑言など相手にしない。よく吠える犬のたとえで、吠えるばかりで噛みつこうとしないのだから、そんなものは自分の相手でない。しかし、もしも手が出たなら、ちょっと待てはないのだ。即座に叩きのめすだけだ。」

他人から搾り取るのはジャゴアンのすることでない。貧しくとも正業に就き、弱者を助け、真理を守る。他人の気持ちを傷つけ、罵詈雑言を浴びせ、殴り、傷を負わせ、殺すようなことは、不徳の行いである。

真のジャゴアンは人生哲学を持っている。己の一生一死は自分がいかに徳行を積んだかということ次第なのだ。生きている間に善を施して行けば、自分の死はアッラーの思召しの通りになる。そういう人生観を持

てるジャゴアンたちは、日常生活の中で自分のカンプンのウラマと協力的にものごとを遂行した。かれらは六信五行を実践し、大勢がハジになっている。

カンプン間の諍いが起こると、結局各カンプンのジャゴアンが出馬して談合し、問題を収める。収まらない問題はまずなかったらしい。カンプンの中で住民の誰かが強盗や窃盗の被害を受けると、ジャゴアンはそれを恥じて徹底的に犯人を探し出した。ジャゴアンが自分の立場や地位にからめてカンプン内の治安を自己の問題として取組んだことから、カンプン住民の尊敬心や依頼心は大いにジャゴアンに傾いた。雇用や任命とは異なる精神的なものが底流にあったということのようだ。[続く]

「南行き街道(33)」(2018年07月24日)

「オラがカンプンのジャゴアン」というのは、住民が共同体の中でその者を持ち上げ、頼り、親愛を向ける、という行動の中に形成されたもので、任命されるものではない。ただしジャゴアンというのも一般名称であることから、暴力好きで他人を虐げることの好きなブンチャッシラツの使い手も同じようにジャゴアンと呼ばれる。住民を搾取するばかりで保護しようとしないうジャゴアンに、住民は背を向けることしかできない。

悪徳保安官が町民をいじめ、町民は正義感あふれる流れ者の拳銃使いがやってきて悪徳保安官を町から叩き出してくれる日を待ち望むようなことがブタウィのカンプンにもあったにちがいない。

悪徳ジャゴアンは金持ちに雇われて用心棒になったり、暴力を使う汚れ仕事を行う取り巻きのひとりになったりもした。そのような仕事は centeng や tukang pukul あるいは tukang maen pukulan と呼ばれた。centeng は福建語の親丁に由来しているが、原意から離れた殴り屋としてムラコ語に取り込まれている。tukang pukul はそのものズバリの殴り屋だ。

タングラン・チオマス・ブカシ・チリリタンなどに広大な私有地を持つ地主たちは、そのような殴り屋を大勢抱えて領民を搾取する手先に使った。言うまでもなく、地主の指示を現場で実行班に実現させるための体制が作られ、要になる者は親方の地位に就いてマンドル(mandor)と呼ばれた。こうなってくれば、やくざ組織と見まがうばかりである。

バタヴィアやその周辺の西ジャワ地方では、私有地制度が活発に営まれた。私有地の地主はあたかも封建領主のように、住民を私有の人間として奴隷のように扱い、税を取り立て、労役を課した。バタヴィア政庁は私有地を治外法権扱いし、私有地の中で地主が行う非人道的な行為に公権力を及ぼすことをしなかった。

私有地がどのようにして設けられ、誰がその地主に納まったかという歴史を見るなら、その現象は十分な確信をもってわれわれに迫ってくるだろう。VOCと其中でうごめいたオランダ人が、どれほど富と支配権力をこの南洋の地に求めたのか、会社は会社で、社員は社員で、考え付くだけのあらゆる手練手管でその理想へのアプローチを推進していったか、ということを実例に示す具体例のひとつがそれであったに違いない。

地主がまるで封建領主のように振舞っていたことは、別の作品「ロー・フェンクイ」からもうかがい知ることができる。「ロー・フェンクイ」は下をご参照ください。

<http://indojoho.ciao.jp/koreg/libkoei.html>

[続く]

「南往き街道(34)」(2018年07月25日)

1912年ごろ、ヴィラノヴァに住む女主人レディ・ロリンソン(Lady Rollinson)は住民に対する苛斂誅求に手心を加えなかった、という記事がネット上にたくさん出現する。この女性地主がイギリス人貴族であるというものやフルネームが Lady Rollinson Van Der Passe となっている情報、更にはレディ・ロリンソンがヴィラノヴァと呼ばれたチリタンのカントリーハウスに住む地主で、そこでのパーティに招かれたフルンフェルドの家の地主の車に投石が行われた、といったものすら登場するため、その辺りの状況は錯綜をきわめている。

地主が誰であったにせよ、領民に対する過酷な苛斂誅求に反抗して立ち上がったントン・グンドゥツ(Entong Gendut)はチョンデッのジャゴアンとされており、チリタンの住民でないことがわかる。チョンデッ地区の地主の館はフルンフェルドの家であり、だからこそチリタンの家を訪れたフルンフェルドの家に住む地主の車を襲うことはありえても、チリタンの家を襲撃する必然性はないようにわたしには思われるのである。

ただしその辺りの状況も諸説紛々としており、本当はどこでどのような状況が展開されたのかということに関

して、わたしの焦点がなかなか定まらないのである。書き残すという習慣を持たないひとびとは口承の民であり、その性質上、このようになることは避けられないに違いない。とりあえずは、広い視野の中でこの事件を捉えていると思われる解説に従って、ストーリーを組み立ててみることにする。

地主はチョンデッ住民に対し、毎週25センの税を取り立てた。そのころはコメ1キロが4センだったそうで、これは重税と言っておかしくないだろう。そのすべてが植民地政庁に納められるものでないのは明白であり、国税がその中のどれほどのシェアだったのかはよく分からない。地主は政庁に対して地代と収穫の納税および労役に労働力を差し出す義務を負っていたが、地主自身も領民から同じような名分のもを徴収していたから領民にとってはダブルパンチであり、おまけに地主の徴収には何の規制もかけられなかったようだから、まるで中世ヨーロッパの暗黒時代のようなありさまが20世紀前半まで続いていた。

取り立てに回るのは地主に雇われているチェンテンやマンドルたちで、暴力の威嚇が使われるのが常であり、どうしても払えない家に対しては地主の持つ田畑を一週間耕作させる課役が与えられたり、あるいは収穫を禁止されたこともあったらしいが、そのうち裁判にかかるスタイルが一般化した。[続く]

「南往き街道(35)」(2018年07月26日)

私有地に関する新たな法令が1912年に施行され、地主は税を納めない農民への裁判権を与えられたことから、地代や住民税の未払いあるいは労役代償の金納などに関連して、1913年に2千件、14年5百件、15年3百件の裁判が行われた。判決は滞納金に罰金に加えられた上、裁判費用が敗訴者(つまりは滞納者)の負担にされ、期日までに納めなければ私財没収や売却、あるいは焼却が命じられた。金がないために滞納したのだから、そんな判決に対して無い袖を振ることなどできはしない。農民は破産し、どこかの誰かを頼って無一物で故郷を離れるしかなかった。

陋屋の中には一物もない、という家などは火をかけて燃やされるのが普通だったようだ。

ただ、領主は奴隷扱いできる領民がいてこそ繁栄を期待できるのだという原理にそぐわないように思われるその状況がわたしには今一つ釈然としない。

チョンデッでは、タバという名の老農夫がメステルの地方裁判所で行われた裁判で7. 20フローリンと諸費用の納付を命じられた。期日中に納めない場合は資産が売却されて納付に充当される。

1916年3月7日、地主のチェンテンたちを従えた強制執行の役人たちがタバの家に来てきた。多数の地元民が北隣の家が集まって来て、罵りや呪いの叫び声をあげたが、何をすることもできない。法的処理はつつがなく進められた。

チョンデッのジャゴアンであるントン・グンドウツも現場を遠巻きにして見守るひとびとの中にいた。そのとき、かれの内面でひとつの爆発が起こったにちがいない。「もう許せない。」という決意が弾けたのだ。

タバの資産は3月15日にマンドルのひとりが4. 50フローリンで買い取った。行政官と地主、そしてかれらに使われているチェンテンやマンドルたちが法律を盾にして行うゲームの被害者は、団結を余儀なくされた。自分たちの身を守るためにントン・グンドウツが組織する自警団に参加する住民が増えた。この自警団には近隣カンプンのジャゴアンたちも横のつながりを示した。

ントンというのはブタウィ語で男児を意味する言葉だ。グンドウツは「デブ」の意味で、これらは明らかにあだ名なのだが、本名や生年月日、出生地などの情報が見つからない。この人物については個人情報がなく、あだ名だけでヒーローになっている。

ントン・グンドウツはその人望を見込まれて地主がチョンデッの公認副王(要するに地元の大親分)にしてやろうという話をもちかけたとき、けんもほろろに断ったという談や、子供のころの異才を物語る話として、力の強いガキ大将たち数人に力いっぱい自分の腹を殴らせたあとケロッとした涼しい表情でそこに立っていたなどという地元の古老たちの回想談もあり、またかれ自身の子供二男一女の孫がまだ地元において、祖父の称揚譚をいろんな人から聞いて育ってきているものの、先祖に誰がおり、誰がどこで名の知られた誰それとどうい関係を持ち、家系がどうであるというような情報がまったく記事にされていないのも、インドネシアでは珍しいケースではないかという気がわたしにはする。

[続く]

「南往き街道(36)」(2018年07月27日)

1916年4月5日、レディ・ロリンソンの住むチリタンのカントリーハウスで祭が行われ、夜っぴてトペン舞踊が演じられ、チェンテンたちは博打に興じた。その日、ントン・グンドゥツ率いるチョンデッ自警団はカントリーハウスを取り囲んだが、何事も起こらずに夜は更けて行った。

この日夕刻、フルンフェルドの家に住む地主アメント家当主の自動車が北西にある橋を渡っていたとき、投石を受けた。

夜半23時ごろになって、ントン・グンドゥツは邸内にいるトペン舞踊者と楽団に外から終了を呼びかけた。邸内にいた地元民らは物売りたちも含めて、ジャゴアンの命に従って家に帰って行った。当時は一般に、踊り子というものは売春婦を兼ねていた。

邸内のひとびとは祭を妨害されて腹を立てたが、チェンテンたちが外へ出て騒動を起こすのはまずいと考えて自粛させ、翌日官憲に訴えて妨害者を逮捕させることにした。自警団もチリタンの家に対する襲撃は行わず、その夜は何事もなしに解散した。

レディ・ロリンソンからの訴えを受けた郡長はパサルボ(Pasar Rebo)の副郡長に指令を発した。「ントン・グンドゥツを即座にメステルに出頭させよ。」

副郡長と警察署長が警官隊を連れてバトゥアンパルのントン・グンドゥツの家を訪れた。かれをメステルに連行しなければならないのだ。祭を妨害した理由を問いただすとかれは、「宗教の教えだ。」と答えただけだったが、かれの意図はハラムである賭博と売春をやめさせることにあったようだ。いやそれよりも、かれは地主やオランダ人支配階層に嫌がらせを行って、闘争気分をウオームアップさせていたように見える。

副郡長と警察署長がントン・グンドゥツや自警団の首脳らと口論していると、ントン・グンドゥツは突然クリスを抜き放って足を踏み鳴らし、「われは大地を踏み、大地は海となる。副郡長と警察署長はわれの信奉者であ

り、われは汝らを保護するであろう。」と述べた。それを合図にして、物陰から自警団メンバーが手に手に武器を持って飛び出してきた。副郡長と警察署長は拘禁された。

拘禁されたふたりはプリブミだったように思われる。ントン・グンドウツはふたりに対し、民衆が警察を嫌うのは警察が異教徒の手伝いをして民衆の家を差し押さえたり、焼いたりしているからだ、と述べた。更には、異教徒を主人に仰ぐ者は殺されなければならないと語り、そのロジックが既述の「信奉者になるなら保護される」という言葉につながっていく。[続く]

「南往き街道(37)」(2018年07月30日)

そのロジックは最近のジャカルタ都知事選でも繰り返された。アホツ氏の華人という要素よりも、かれがキリスト教徒であるという要素のほうが反アホツキャンペーンに効果的に使われたのである。華人嫌悪という精神性よりも、異教徒を主人(都知事に選ばうとすること)に持つムスリムは背教の徒であるという論理のほうがはるかに選挙民自身のアイデンティティに突き刺さってくるのがらになるのは言うまでもあるまい。

自警団の中はジハードの気分満ちていた。指導者ントン・グンドウツは自ら王を名乗り、「われはジャワの救世主として待ち望まれている神の使いであり、この後ジャワを征服にやってくる日本人と戦って、かれらを海の中に投げ飛ばす。」と宣言して、民衆の喝采を浴びている。

貧困であれ、圧制であれ、イデオロギーであれ、ゼノフォビアであれ、インドネシアにかつて起こった民衆蜂起のたいていはイスラムのジハード観念やイスラム風に変形された救世主思想が結びつけられている。普段はただの卑屈な農民が武器を手にして殺すか殺されるかという場に自ら進んで臨む意欲を持つとき、聖戦意識と死後の極楽の約束は大きな駆動力となった。それとまったく同じ根は中世の日本統一事業の中に出現しているとわたしは理解している。

以後の日本の為政者はその要素の再出現を徹底的に抑制し、宗教を枠組みに持つ民衆の生活共同体が作られないように努めた。現代日本人の宗教観はそういう歴史の上に培養されたものであり、その観点からウンマーというイスラム社会を眺めた場合、イスラムという宗教のあり方を支えている本質は日本人の目にまず

形をとって映ることがないだろうとわたしは見ている。

宗教を枠組みに持つ生活共同体が日本に出現したとき、それに対する嫌悪感情や排斥意識が社会の大意として起き上がるのは、そういうものがない社会が長期に渡って築き上げられ、そのあり方が自然なものという共通認識の形で伝統的に伝えられてきたことによっている。その意味で為政者の国内統治における宗教の扱いは成功したと言えるのだろうが、反対に宗教というものをそういうパースペクティブでしか見られなくなった日本人は、国外に存在して勢力を張っている宗教というものへの理解がまったく偏ったものになってしまうという宿命の中にいることを忘れてはなるまい。[続く]

「南往き街道(39)」(2018年08月01日)

この事件のあと、政庁はチョンデッ住民に強い疑いを抱いて厳しい取調べを続けた。何人もの住民が連行されたあと戻ってこなかったことが明らかになると、大勢の男たちが故郷のチョンデッから姿を消した。バタヴィアの街中でも、チョンデッ出身であることを名乗る者がいなくなったという。

このントン・グンドウツの蜂起事件というのは、長い前置きでその意味合いがくどくどと述べられているわりに、事件そのものはきわめて単純な展開であり、実にあっさりと幕を閉じた印象が強い。

軍事力とは全く無縁の私有地領民で且つ農民層の民衆がジャゴアンの指揮下に蜂起したという内容が、植民地政庁上層部に恐怖感と呼び起こしたのかもしれない。その恐怖感がエコーとなって事件後のチョンデッ住民に対する激しい弾圧に姿を変えたと見るのは、うがちすぎだろうか？

さて、チリリタンの家とフルンフェルドの家の双方がヴィラノヴァという名称で呼ばれていることに端を発する混乱を整理してみたい。

グドン・チョンデッ・パサルボー帯の大地主はフルンフェルドの家に住むアメント家の当主であり、チョンデッ住民に苛斂誅求を課したために住民蜂起を誘った地主というのはかれだったように思われる。

つまりレディ・ロリンソンはチリリタンのもっと狭い地域の地主ではあっても、チョンデッまでカバーするほどの地主でなかったということであり、チョンデッ住民が直接的に憎悪を向ける対象でなかったように思われる。それはタンジュンオーストの地主が住むフルンフェルドの家が先に建てられ、チリリタンの家がもっと後で建てられていることからもうかがい知ることができそうだ。

その意味から、格式はフルンフェルドの家の方が上であって、総督や高官が立ち寄る可能性はそちらの方が高かっただろう。だからと言って、それとヴィラノヴァを結びつける根拠にはできない。むしろ言葉の原意から、後で建てられたチリリタンの家がそう呼ばれた可能性だって否定できないのだから。[続く]

「南行き街道(40)」(2018年08月02日)

グドンの南はチジャントウン(Cijantung)だ。この地名もチリウン川の支流から取られたもので、スダ語のジヤントウンはバナナの花を意味しているそうだが、チジャントウン川とバナナの花が関わっているのかいらないのかはわからない。

マタラムのスルタン・アグンによるバタヴィア進攻からかなりの歳月が流れた1657年11月4日、バタヴィアのカスティルから内陸部に向かう探検隊が出発した。フレデリック・ミュラー(Frederick H. Muller)大尉を隊長とする探検隊は、白人兵士14名と15人のマーダイカー(解放奴隷)で編成され、10人のプリブミが道案内に就いた。

この内陸部に向かったバタヴィア最初の探検隊は、内陸部にマタラム人の集団が住み着いていることや、またバンテン人がプリアガン地方への往来に使っている道がチリウン川沿いにあるといった情報を確認するために現場を実地検分することを目的にしていた。

一行はジャングルの道なき道を通り、苦勞の末に三日かかってチジャントウンにたどり着いた。一行はそこでブラジャワンサ(Prajawngsa)と名乗る部落長が統治する12戸から成る集落を発見した。

メステルコルネリスからチジャントウンへは12キロほどの距離であり、バタヴィアのカスティルからでも25キロほどしかないが、その行程に三日も要したというのは、いくらカンブンムラユが開拓されはじめたとはいえ、そ

の更に南側はいかに人間の進入を寄せ付けないうジャングルであったかということが推測される。

チジャントウンを更に下れば、プカヨン(Pekayon、植民地時代の綴りは Fekajong)そしてチブブル(Cibubur、植民地時代の綴りは Tjiboeboer)と続く。

チブブルという地区名称はチブブル村に由来している。広大な土地をオランダ人地主が自領にしたとき、そこにあった村の名称を領域名にしたようだ。ムンジュール(Munjul、植民地時代の綴りは Moendjoel)村という別称で呼ばれることもあったらしい。行政管轄はメステル・コルネリスに含まれ、バタヴィアとバイテンゾルフの間地帯に入っていた。

[続く]

「南行き街道(41)」(2018年08月03日)

1847年10月2日、オランダ政庁はチブブルの土地を没収した。広大な水田・水牛・馬そして言うまでもなく地主のカントリーハウスも含まれる。家具類一切から他の資産まですべてが没収された。その被害者になったのが誰だったのかはよくわからない。

政府が資産を没収すると、しばらくしてから競売に付される。コンセッションと呼ばれる土地の使用権の貸与である。チブブルの土地の公開競売がいつ行われたのかはわからないが、そのころタンジュンオーストの地主だったアメント家が最高値を付けたにちがいない。

結局チブブル地区はアメント家の手に落ちた。

アメント家がこのメステル・コルネリスの南部に広がる広大なエリアの地主となった経緯は次のようなことだったようだ。これから述べるストーリーは新たに得た情報であり、先に述べてあるタンジュンオーストの由来に関する話とはいささか趣が異なっている。こちらの方が史実として整然としている印象が濃いため、既出の話と不一致な部分が出てくるだろうが、お赦し願いたい。

この一族は元々チルボンで製糖業を営んでいた。シェリボンセサイカー(Cheribonsche suiker = チルボン砂糖) という屋号で成功していた家系らしい。1821年にアメント家の当主ハルメン・ティーデン・アメント(Harmen Tieden Ament)がタンジュンオーストの地主であるダニエル・コルネリス・ファン・リームスダイク(Daniel Cornelis van Riemsdijk)から15万ルピアで購入した。

ハルメン・ティーデン・アメントは息子のチャリン・アメント(Tjalling Ament)にタンジュンオーストの経営を委ねた。1801年生まれのチャリン・アメントは先に華人女性チョア・ジュニコと結婚して一女をもうけていたが、1826年にリームスダイク家の娘ディナ・コルネリア(Dina Cornelia van Riemsdijk)と再婚した。そのときジュニコが亡くなっていたのか離縁されたのかは判然としない。ディナはそのとき19歳だった。

チャリンとディナの間には1827年、長男のダニエル・コルネリス・アメント(Daniel Cornelis Ament) が生まれた。かれが成人するとタンジュンオーストのカントリーハウスでは世代交代が行われて、ダニエル・コルネリスが父親の後を継ぐ。[続く]

「南行き街道(42)」(2018年08月06日)

1852年に結婚したダニエル・コルネリスは1870年に四男三女を連れてヨーロッパのブリュッセルに引っ越した。子供の教育が主要な目的であったようだ。そのとき長男のチャリン・ディーデリック(Tjalling Diederik Sjoerd Auke Ament)は16歳、次男の ECC アメント(Eduard Corneille Collett Ament)は14歳、末っ子のヨハンナはまだ1歳だった。

1870年4月8日付けヤファボーデ(Java Bode)紙に掲載された広告には、タンジュンオーストとチブブルの土地のコンセッション希望者はプカヨンの管理人HMアメント(Hendrikus Michiel Ament)に申し出るように、と書かれている。

ヘンドリクス・ミヒエルはダニエル・コルネリスの弟であり、父親が息子たちをあちこちの土地の地主にしていたことが分かる。

一家は再びオランダ領東インドに帰郷した。一家は本拠地のチルボンに戻ったが、次男の ECC アメントはバイテンゾルフ北郊のチルアル(Ciluar)でビジネスキャリアを開始する。かれは1873年にアントワープのビジネス学校を卒業し、更にロンドンでもう一年ビジネスを学んでから、現場に放されたわけだ。

そのうちに父親のダニエル・コルネリスがバタヴィアに移り住み、1878年に ECC アメントをチブブルの管理人に、兄のチャリン・ディーデリックをタンジュンオーストの管理人に任じて、各地区を管理させた。

チャリン・アメントはタンジュンオーストで製糖事業を試みたがうまく行かず、チルボンへ戻ってしまったため、ECC アメントが1883年からタンジュンオーストとチブブルの二地区を管理するようになる。かれはタンジュンオーストに灌漑設備を設ける工事を行った。

1888年10月16日のバタヴィア商業ジャーナル紙に、タンジュンオーストとチブブルでの狩猟を禁止するという通達が掲載されている。通達者は管理人アメントと記されていた。

当時71歳の ECC アメントアメントがチブブルにおける50年間の歴史を祝う祝賀会を1928年4月1日に開催したとき、近隣の諸地主から政財界上層部に至る3百人もの貴顕紳士が集まった。その機会に、オランダ本国政府が東インド政庁を通じてかれにオレンジナッソー勲章を授与したことが明らかにされた。[続く]

「南行き街道(43)」(2018年08月07日)

近隣の有力地主の中にケイズメイヤー(Kijdsmeir)家がある。この一家はバイテンゾルフ中心部から北西のチアンペア(Ciampea)地区を本拠にして、チロドン(Tjilodong)、チビノンウェスト(Tjibinong West)、タポス(Tapos)、クランガン(Kranggan)の諸地区を領していた。ECC アメントの姉妹のひとりケイズメイヤー家の息子のひとりに嫁いでいる。

地主たちの行為を見ていると、かつて歴史の中に出現した封建領主たちの行動を連想させるものが少なくない。ジャワ島西部では20世紀に入ってまで、そのような状況が連綿と続けられていたようだ。ひとびとの精神の中に刷り込まれてきたそのような社会のあり方が干からびて行くのに、21世紀まで時間がかかっても不

思議でないようにわたしには思われる。

ECC アメントは1935年に没して、チブブルにある家族廟に葬られた。

妻のマリア・スエルモント(Maria Suermondt)と三男一女の四人の子供が残された。祖父の名前を与えられた長男のダニエル・コルネリス・アメントが1928年以来既に父の後を継いでおり、チブブルの経営に当たっていた。そして日本軍進攻がこの一族に最悪の事態をもたらしたのである。

チブブルの西側に隣接しているのがチマンギス(Cimanggis)で、ここはデポック市に含まれるのだが、同じデポック市とは言ってもシャステレインが開いて領有した土地はデポック市中心部であり、このチマンギス郡はイエマンズ(Yemans)一族が地主として領した土地であったことから、イエマンズランド(Yemans Land)と呼ばれた。しかしイエマンズ一族についてのトピックは何も残っていないようだ。

このランド(Land)という言葉の用法は、広大な私有地あるいは特定個人が地主になって単一行政区の趣をなしている領地を指してオランダ人が使った。既出のチブブルにせよ、タンジュンオーストにせよ、オランダ語の文書にはチブブルランドやタンジュンオーストランドという呼称で登場している。

必然的に地主の大邸宅はランドハイス(landhuis)という名称になった。このストーリーの中でわたしが使っているカントリーハウスという英語はオランダ語ランドハイスの訳語として一般に使われているものだが、保養のための別荘という意味合いにとどまらず、領主館(少なくとも地主館)というニュアンスがからみついていることを書き添えておきたい。

[続く]

「南行き街道(44)」(2018年08月08日)

1770年代にヨハネス・ラッハが描いたスケッチ画のひとつに、馬車や牛車が集まっている姿を写したイエマンズランドのカントリーハウスの様子を見ることができる。ポゴール街道はチマンギス郡の中央を南北に貫通しており、イエマンズのカントリーハウスがそのころ、南行き街道を往復する交通機関のための宿駅サービスを商売にしていたことは疑いあるまい。

1808年にダンデルス総督が作らせた大郵便道路 (De Grote Postweg)にも、郵便物送受のための中継ポストが設けられた。イエマンズのカントリーハウスは当然その伝統をもってポストのひとつに組み込まれたのだが、1842年に出されたバタヴィア～バイテンゾルフ間中継ポストのリストにはイエマンズの名前が見られず、チマンギスという名に替わっている。

第1ポスト ビダラチナ (Bidara Tjina)

第2ポスト タンジュン (Tandjoeng) バタヴィアから15パアル

第3ポスト チマンギス (Tjimanggis)

第4ポスト チビノン (Tjibinong) バタヴィアから28パアル

第5ポスト チルアル (Tjiloea) バタヴィアから34パアル

第6ポスト バイテンゾルフ (Buitenzorg) バタヴィアから39パアル

というのがそのリストだ。

イエマンズランドからチマンギスランドに替わったときの経緯はよく分からない。地主が替わり、先代の地主の名前でその土地を呼ぶことをよしとしないひとびとが呼称を変えたのかもしれない。少なくとも19世紀に入るころ、イエマンズ一族は姿を消していた可能性が高いように思われる。

ところで、2018年に入ってから、チマンギスの家(Rumah Cimanggis)と呼ばれているカントリーハウスに一躍脚光が当たった。チマンギス郡スツマジャヤ(Sukmajaya)にある国営ラジオ局RRIの送信施設用地の中に含まれているかつてカントリーハウスだった廃屋をインドネシア国際イスラム教大学建設のために取り壊す計画が世に流れて、歴史保存を叫ぶひとびとが反対の声を挙げたのがその発端だ。

資料によれば、そのカントリーハウスは1771年から1775年にかけて建設されたとなっているが、1778年に完成したという記事もある。このカントリーハウスは新しく建てられたのだから、イエマンズランド時代のものではない。

施主はファン・デル・パツラ(Petrus Albertus Van der Parra)元第29代総督であり、二番目の妻アドリアナ・ヨハナ・バーケ(Adrianna Johanna Bake) を住まわせるために建てたそうだ。ヨハナはそのカントリーハウスからおおよそ1キロ離れた場所に市場を設けた。今その市場はパサルパル(Pasar Pal)と呼ばれている。[続く]

「南往き街道(45)」(2018年08月09日)

アドリアナ・ヨハナ・バーケはダヴィッド・ヨハン・バーケ(David Johan Bake)の長女として、1724年にアンボンで生まれた。ダヴィッドは1718年にVOCの下級商務員として東インドでの履歴を開始し、1733年にはアンボイナ長官に登り詰めている。

アドリアナ・ヨハナは若い年齢でアンボイナ軍船隊司令官と結婚し、1738年にダヴィッドが没すると夫と共にバタヴィアに移った。1743年に夫がバタヴィアで死去すると、やもめになっていたファン・デル・パッラと4カ月後に再婚した。ファン・デル・パッラは先妻との間に二男一女をもうけていた。

ところがアドリアナ・ヨハナとの間には長い間子供ができず、かの女は親族や身近なひとびとの子供を養育することをしきりに行なうようになった。そして1760年に待望の男児がふたりの間に生まれたものの、この息子は1783年に夭逝する。

アドリアナ・ヨハナは、1787年に没するまでその家で暮らしたようだ。しかしチマンギスのカントリーハウスを相続すべき、自分の血を分けた子供がいなくなったことから、自分が養育した子供たちのひとり、デヴィッド・スミスがその邸宅を受け継いだ。

このデヴィッド・スミスがチマンギスの家を設計したという話もあれば、かれは美術品をこよなく愛して邸内を養母のために美しく飾ったという話もあるのだが、少なくともアドリアナ・ヨハナの没後もその家が他人の手に渡ったわけではなさそうだ。しかしデヴィッド・スミスは何らかの事業に失敗して破産し、その家を去った。その後、そのカントリーハウスは南往き街道を上り下りする旅人にとっての宿駅として使われるようになった。

その後チマンギスの地主として登場するのは、メステルコルネリスのカピテンチナから差配を受けるブカシの初代レツナンチナになったラウ・テッロツ(Lauw Tek Lok)だ。かれのレツナンチナ就任は1854年のできごとである。

19世紀初期にバタヴィアの5大アヘン公認販売者のひとりだったラウ・ホウ(Lauw Houw)の家に生まれたテッロツの名前は新聞の常連になっていたが、1869年3月の新聞に「バイテンゾルフのバトゥウリスに豪邸を持っている」という記事が登場し、更に1873年8月にはバタヴィアのタナアバンとパサルバルに邸宅を持っていると書かれた。

1880年にはグロドツに家があるとの記事もある。かれの生年は1818年と推定されているから、若い時期の話ではない。[続く]

「南往き街道(46)」(2018年08月10日)

東インド植民地政庁がチマンギスの土地の一部を軍用地に買い上げる交渉をテッロツと行っているという記事が1876年8月11日のヤファボーデ紙に掲載されている。チマンギスに軍守備隊駐屯地を設けるのは、1860年代にラトゥジャヤ(今のポンドッテロン Pondok Terong)で発生した反乱に鑑みて、メステルとバイテンゾルフの中間地域の鎮圧能力を高めることが目的だった。ラトゥジャヤの反乱は先に起こったブカシの反乱の延長線上にあり、ブカシ反乱のリーダーの一部がラトゥジャヤに逃げた後、態勢を立て直して行ったものだった。

軍用地買い上げの前にも、バタヴィア～バイテンゾルフ間の列車線路建設用地買収が行われており、バタヴィア高等裁判所がポンドッチナ・デポツ・ラトゥジャヤの私有地の一部を政府が補償金を払って強制収用する判決が出されている。チマンギスには線路が通らなかった。

1881年7月20日のバタヴィア商業新聞が、ラウ・テッロツがバイテンゾルフのカピテンチナにチマンギスの土地を27万フローリンで売り払ったことをすっぱ抜いた。タパヌリのバタントル川に建設中の東インドで一番長い百メートルの橋の工事費用総額が14万フローリンでしかないのに比べて、27万フローリンが異様な高値であることに世人は首をかしげた。バタントル橋は1879年に着工され、1883年に完成した。もちろん、そのふたつの間には何の関係もない。

ラウ・テッロツは従来からチマンギスの経営にあまり意欲的でなかった印象が強く、地主の交代がチマンギスの今後の発展を促すよう期待されているとの声が新聞に記載されていた。それから一年も経たない1882年5月、ラウ・テッロツはメステルコルネリスで世を去った。

チマンギスの西側に接しているポンドッチナの地主がラウ・チェンシアン(Lauw Tjeng Siang)であることを1898年6月のバタヴィア新聞が明らかにしている。ラウ・チェンシアンがラウ・ホウ一族の一員であったかどうかは確認できないものの、かれらもやはり封建領主もどきの行為を行っていた可能性は否定できない。[続く]

「南往き街道(47)」(2018年08月13日)

ラウ・テッロツの業績は植民地政庁を十分に満足させるものであったが、かれが1848年生まれのボヘミア系欧亜混血娘フランシスカ・ルイザ・ゼシャ(Francisca Louisa Zecha)を妻にしたことは植民地支配階層の不興を買った。

夫の没後1884年にフランシスカは夫の秘書シム・ケンクン(Sim Keng Koen)と再婚し、バタヴィア上流層の間で一大スキャンダルとして騒がれた。フランシスカの子孫がインドネシアのホテル業界で著名なアドリアン・ウィレム・ラウ・ゼシャで、かれはアマンリゾートのオーナーである。

1946～47年には復帰してきたオランダ文民政府と植民地政府軍がジャカルター帯を制圧し、それに続く第一次警察行動のとき、ジャカルタ南部方面の軍事行動の際にアドリアナ・ヨハナのカントリーハウスは司令部として使われた。

1953年にはサムエル・デ・メイヤー(Samuel de Meyer)という人物への不動産名義変更が行われている。1964年にその地域の広大な地所に国営ラジオ局RRIが大型送信アンテナ3基を設けた。そのときそのラジオ施設用地がRRIの資産にされたようだ。必然的にアドリアナ・ヨハナのカントリーハウスもRRIの資産となる。

1978年にRRIはそのカントリーハウスを社員家族寮として使い、13家族用に建物内を改装した。しかし老朽化のために2002年ごろから使われなくなって、完全に空き家となり、風雨に痛めつけられて廃屋化した。

しかし地元歴史愛好家の話によれば、空き家となってからは完全に見捨てられ、何の補修もなされなかったものの、2009年まで建物は完璧な姿で立っており、屋根も崩れていなかったそうだ。崩れ始めたのは201

1年に入ってからで、2013年には四分の一が崩れ、2016年にはもはや残骸に変わってしまったとのことだ。

[続く]

「南行き街道(48)」(2018年08月14日)

チマンギス郡からボゴール街道を更に南に下ると、チロドン(Cilodong)郡に入る。元はスツマジャヤ郡の町だったが、2007年に郡に昇格した。チロドンには陸軍第328戦略予備軍司令部が置かれており、チロドンという地名を聞くと Kostrad という言葉が脳裏に浮かんでくるインドネシア人の方が多いようだ。

チロドンランドの名前は1820年3月11日のバタヴィア新聞にあるのがもっとも古いものらしい。バイテンゾルフ市庁が43, 319フローリンの地租税で競売に付し、スキピオ・イセブランドウス・エルヴェシウス・ファン・リームスデイク(Scipio Isebrandus Helvetius van Riemsdijk)が手に入れた。チアンペアの地主、ウィレム・フィンセンツ・エルヴェシウス・ファン・リームスデイク(Willem Vincent Helvetius van Riemsdijk)の十番目の子供だ。

スキピオは1785年にバタヴィアで生まれ、1805年から11年まで、ダンデルス時代に作られた東インド政庁の要職に起用された。1820年にかかれはチロドンの地主になったが、1827年1月に世を去っている。

スキピオはバリ人のマニスを妻にし、子供を7人もうけた。最初の子は娘で、政庁の高官の妻になった。二番目が長男のウィレム・マルティヌス・ケイズメイヤー(Willem Martinus Kijdsmeir)で、タンジュンオーストの地主の末娘と結婚し、農園事業で成功した。三番目と七番目の子は1837年に世を去った。五番目の娘はグドゥのレンデンの妻になった。六番目はカタリナ・ヨハンナ・ケイズメイヤー(Catharina Johanna Kijdsmeir)という名の娘で、植民地政庁保健局長 Dr. Geerlof Wassink と結婚し、夫は定年退職後タポス(Tapos)ランドを買って地主になった。タポスはチロドンに隣接している。

スキピオの後を継いでチロドンの地主になったのは5番目の子供アブラハム・ピーテル・ケイズメイヤー(Abraham Pieter Kijdsmeir)だった。アブラハム・ピーテルは他の兄弟姉妹と異なっていたようで、バリ人の母の血が濃かったのだろうか、自分をプリブミと考える傾向が強かった。そのせいか、サイバという名のプリブミ女性と結婚している。[続く]

「南行き街道(49)」(2018年08月20日)

別の資料では、スキピオは連れ子を7人持つバリ人女性を妻にし、その子供たちを全員洗礼させて養子にしたと述べられている。更に子供たちに姓を与えて伴侶を持たせ、チロドンの土地を代々受け継がせたという説明だ。

デポック(Depok)ランドのオーナーであるコルネリス・シャステレインが1714年に没してから、自分の家族や奴隷たちがその土地での生活を確立できるようにいろいろ取り計らった故事を思い出させるような話になっている。

更にボゴール街道を一路南にボゴール市を目指して進むと、ついにチビノンにたどり着く。ここは今、ボゴール県チビノン郡になっている。チビノン(Cibinong)という地名のビノンというのは樹種の名前で、板根を作る巨木のテトラメレスを指している。

現在ボゴール市(Kota Bogor)を取り巻いているボゴール県(Kabupaten Bogor)の県庁は1982年までボゴール市内のパナラガン(Panaragan)に置かれていたが、1982年政令第6号で移転が定められて1990年にチビノンに移ったため、ボゴール県の県庁所在地はこのチビノンになっている。

VOC時代のチビノン私有地の地主が代々誰だったのかについての記録は見つかっていないが、ダンデルス時代に政庁の要職に就いていたスキピオ・イセブランドゥス・エルヴェシウス・ファン・リームスダイクがジャワ島のイギリス統治時代が幕を閉じてオランダ植民地政庁が私有地制度を復活させたときにそこを手に入れた可能性は大きい。

1820年3月にバイテンゾルフ市庁の行った43,319フローリンの地租税での競売に勝ってチロドンランドをスキピオが手に入れたあと、かれはチビノンランドを売却してチロドンに引きこもろうとしていたらしい。しかしどうやら、その計画はうまく進まなかったようだ。チビノンランドの地主はかれの子孫が継承している。

チビノンと隣接するチロドンのふたつの私有地を、かれは巧みに経営していた。1821年6月9日付けのバタヴィア新聞に、S. Is. H. リームスデイクの署名でチロドンランドの邸宅を売りに出す広告が掲載されている。

[続く]

「南往き街道(50)」(2018年08月21日)

1827年1月11日にかれは生涯を閉じたが、遺族はかれの遺志を継いで1827年4月14日にバタヴィア新聞に広告を載せた。売りに出されたのはチビノンランドの南部にあるナンゲウェル(Nanggewer)地区とチビノンオースト(Tjibinong Oost)地区で、ナンゲウェルはバタヴィアから十時間の距離にある農園エリアであり、チビノンオーストは乾燥地と草地から成っている土地で、石造りの邸宅のほか石造りの建物や木造倉庫あるいは車庫などもあり、更に中国人が働いている倉庫も5軒あって、パサルへのアクセス路も設けられていると説明されている。

どうやらチビノンランドはチビノンオーストとチビノンウエストに分割されたらしく、当初はその両方でスキピオの子孫が地主になっていたが、最終的にチビノンオーストは売却され、チビノンウエストがスキピオの子孫によって代々継承されたようだ。

チビノンの町からボゴール街道を更に南下し、ナンゲウェルを越えてクダウンハララン郡に入ると、そこはもうボゴール市だ。ボゴール市街に差し掛かるエリアにまで来れば、このボゴール街道の西側にあるデポツ市から下って来る街道、デポツ市のもっと西側にあるボゴール県パルン(Parung)の町から下って来る街道が集まって来る。ボゴール市がどれほど深くその周辺地域のセンターになってきたかということが、そこから想像できるにちがいない。

ない。

ボゴール街道がボゴール市内に入ってパジャジャラン通りに名を変え、しばらく南下を続けると右方向に向けてAヤニ通りが分岐する。Aヤニ通りはヴィッテパアルを経てボゴール宮殿の正面に向かう道だ。

一方、パジャジャラン通りはボゴール植物園の東縁をかすめながら更に南下してタジュール街道(Jl Raya Tajur)となり、チアウィ(Ciawi)に向かう。チアウィは農業地帯であり、バイテンブルフからスカブミへ南下する街道と、東に向かってグデパンラゴ山系を山越えしてチアアンジュールに向かうブンチャツ街道の三つが交差する交通の中継地として発展した町だ。

昔、バンテンが威勢を誇っていた時代に、王宮が領民に命じた藍・綿糸・コーヒーの供出を嫌がったひとびとが逃亡してこの地区に住み着いたという故事もある。[続く]

「南行き街道(51)」(2018年08月23日)

地名の由来としてこんな話が語られている。昔、バンテンとチルボンによるイスラム化が進み始めたころ、この地区の地場支配者は仏教に固執してイスラムを拒否した。チルボン王宮は優れた女性サントリを選んでその支配者をイスラム化するよう密命を与える。

かの女はイスラムが優れていることを説いて説得しようとしたが、支配者の気持ちは変わらない。正攻法ではダメだとわかったため、かの女は策略を設けた。川の近くに竹で囲まれた水浴場を作り、木や花を植え、愉しくくつろげる様子に仕立て上げ、そこを通りかかる者はついついそこでひと時を過ごしたくなるようなものにした。

そんな場所があることを噂で聞いた支配者は、ある日そこを訪れて気持ちよくなり、ゆっくりと水浴した。魔力を持つクリスを衣服と一緒に置いて、かれはのんびりと水浴を済ませてから上に上がったところ、なんと女性サントリが自分の魔力を持つクリスを手にして、「さあ、イスラムに入信せよ」と迫って来たではないか。

かれにとって女性サントリを打ちひしぐのは赤子の手をねじるようなものだが、魔力を持つクリスの方が怖い。結局支配者は、女の知恵に敗れたという無様な評価を避けるためにその地方から逃亡し、この地域はイスラム勢力の前に明け渡されてしまった。

こうしてスダ語で水を意味するチ(ci)と竹を意味するアウィ(awi)を合わせたチアウィがこの地名として定着したというストーリーだ。

ファン・イムホフ総督は1751年、チサルア・ポンドグデ・チアウイ・チオマス・チジュールツ・シンダンバラン・バルブル・ダルマガ・カンブンバルの9ディストリクトをひとつの行政単位にまとめてバイテンゾルフレヘント行政区にした。それ以来チアウイは農産物の貢納と更に西へ向かう交通の中継地としてVOCの監督下に入ることになった。

1847年以降の歴代チアウイ村長の名前は残されているようだが、それ以前の状況はよくわからない。結局チアウイが歴史の中で歩んだ評価はその程度のものでしかなかったということなのかもしれない。

チアウイから街道を13キロほど南下すると、チゴンボン(Cigombong)村に達する。街道からそれで東に向かうと、3キロほどのところにリド湖(Danau Lido)がある。

植民地政庁が1898年にバイテンゾルフ〜スカブミの道路工事を行ったとき、オランダ人の工事監督官が快適に過ごせる宿泊場所を工事関係者らが探した。そして山に少し入ったところの山峡が避暑保養にも適している場所であるのを見出して、監督官にそこを勧めた。[続く]

「南往き街道(52)」(2018年08月24日)

総面積1.7Haのリド湖は、周辺の湧水や山峡を流れ落ちる水をせき止めて作られた人造湖だそうだ。せき止めるために分厚いガラス板が使用されたそうで、そのガラス板は今やタンバカン(Tambakan)部落の下に埋もれているらしい。

このリド湖にヴィラやコテージを建てて観光開発を行ったのはオランダ人アントニウス・ヨハネス・ルドフィクス・マリア・スウェイスン(Antonius Johanes Ludoficus Maria Zwijsen)だ。1898年にオランダで生まれたかれは、1919年に警察高官としてバタヴィアに駐在を命じられた。その勤務に関連して1935年に、かれはスカブミの警察エージェントであるカタリナ・アンナ・ベームスター(Chatharina Anna Beemster)と知り合い、恋に落ちる。カタリナは女性ながら、警察高官の父親の影響を受けて警察エージェントとして植民地政庁に奉職していた

ようだ。ふたりは1937年に結婚する。

スウェイスンはバタヴィア駐在勤務を終えるとメンテンのゴンダンディア地区にあるホテルネーデルランドに就職して働き、目途を付けたところでハルモニーにあるホテルを買い取り、その一方でリド湖にヴィラやコテージを建てた。

リド湖のヴィラやコテージはスウェイスンとカタリナが週末を過ごしたり、親戚や友人知人を招いてパーティを開いたり、更にはスウェイスン所有ホテルの客に利用させるといった個人用途とビジネス用途を混在させる使われ方がなされたようだ。

1940年にウィルヘルミナ女王が宿泊するためにオラニェリド(Oranje Lido)レストランが作られて、盛大な晩餐会が催された。その出来事を期に、リド湖リゾートは一般公開されて、客が自由に訪れることのできる場所になった。

日本軍の進攻でスウェイスンとカタリナの一家はオランダに移った。日本軍はこのリド湖リゾートを一部破壊したが、破壊しつくされることは防がれたようだ。戦後戻って来たオーナー一家は昔のビジネスを再開させたものの、1953年再びオランダに引き上げざるを得なくなった。

現在このリド湖リゾートは Lido Lakes Resort & Conference という名前で営業しているが、2018年中旬ごろまで改装のために利用できない状態にある。再開が待ち遠しいところだ。[続く]

「南行き街道(53)」(2018年08月27日)

チゴンボン村から24キロ更に南に下るとチバダッ(Cibadak)村に着く。街道はここで東に向きを変え、20キロ弱でスカブミの町に至る。一方、ここからは更に南に向かう道路があり、50キロほど走ればプラブハンラトゥに行くことができる。プラブハンラトゥへはチバダッ村に入る手前で西に折れる道路があり、このルートを取れば距離はもっと近いが、山中のあまりにぎやかでない道を通ることになる。

1687年にピーテル・スキピオ・ファン・オーステンデ(Pieter Scipio Van Oostende)率いる第一回探査のた

めの探検隊がボゴール高原の寂れた村に大きな街の遺跡を発見したあと、更に南方のプラブハンラトゥ(Pelabuhan Ratu)まで歩を進めて、インド洋岸にたどり着いている。

1690年にはアドルフ・ウィンクラー(Adolf Winkler)の探検隊が探査を行い、そのあとアブラハム・ファン・リーベークの探検隊が1703年・1704年・1709年にプリアガン地方奥深くまで探査した。1709年にはグデパンラゴ山系を越えてスカブミ地方に達し、コーヒー栽培の可能性を調べている。

1709年に第8代総督となったリーベークは1712年にプリアガン地方で試験栽培させようとしてコーヒーの苗を携え、当時オランダ人がヴァインコープスバアイ

(Wijnkoopsbaai)と呼んでいたプラブハンラトゥに海路達してそこで上陸した。プラブハンラトゥに海からやってきた最初の西洋人がかれだったわけだ。リーベークはそのときの旅で、パパンダヤン火山とタンクバン普拉フ火山に登って火口で硫黄の調査も行った。火薬の原料は必需品なのだ。

リーベークは1713年11月にバタヴィアで総督在任中に死去したが、タンクバン普拉フでの硫黄調査で健康を害し、それが命取りになったと言われている。享年60歳だった。

スカブミの町の中心部まで行かないあたりに、街道から左に折れて山に向かう道がある。チバダツ村からおよそ13キロほど進んだチサアツ(Cisaat)の警察署の手前に左に折れる道がある。そのカドゥダンピツ(Kadudampit)通りを山に向かって16キロあまり走ると行楽地シトゥグヌン(Situ Gunung)に行き当たる。[続く]

「南往き街道(54)」(2018年08月28日)

海拔950メートルに位置するシトゥグヌンは気温が28℃以下で、夜は16℃まで冷え込む。シトゥはスンダ語で池や沼を意味する言葉だ。総面積6Haのシトゥグヌンは文字通り山の池なのである。この行楽地は森林公社プルフタニのスカブミ支社が運営するもので、会議場のある宿泊施設やテントを貸し出してくれるキャンプ場、アウトバウンド設備やジョギングあるいは森林ウオークもあって、山と森を満喫できる場所になっている。おまけに周辺にはいくつも大きな滝があって、山の愉しみを更に盛り上げてくれる。

この山の池は人造のものであり、天然の池ではないという話になっている。池は年に一回、祭事が催されたあとで水の総ざらえが行われる。堰を切ると、水面は予想外の速さで下降して行き、底が現れる。確かに削られたあとが見られることから、人造の池であることは確認されている。ところが、その水底に転がっている魚が一尾もないのだ、と土地の人は語る。水がある時には池に確かに魚が泳いでいるのが見えるし、釣りをすれば10キロを超える大物がかかることもあるというのに、だ。そして再び水を満たし始めれば、水源は周囲にある数カ所の湧水だけだというのに、また意外な速さで水面が上昇して行くそうだ。

この池の由緒来歴については、こんなストーリーが語られている。

昔マタラム王国とオランダ人の戦争が激しくなり、王都が脅かされるようになったとき、王族や領民があちこちへ逃亡した。ランガ・ジャガッ・シャハダナ(Rangga Jagad Syhadana)もそのひとりだった。かれは最初から反オランダの旗幟を鮮明にしていたため、オランダ側はかれを捕らえて処刑しようと考えていた。

マタラムの王都を脱出したシャハダナはバンテンに保護を求め、バンテンを最終目的地にしてマタラム王国領の西ジャワに入った。クニガン(Kuningan)に滞在しているとき、かれはクニガンの女を妻にした。そこから、妻を連れての旅が始まった。プリアガン地方に入り、ウクルの地を経てチアンジュールに至る。しかしチアンジュール～スカブミのルートもバイテンゾルフにつながるブンチャツ街道をも通るわけに行かない。オランダ人の勢力下にあるそれらのルートを通れば、いつどこでオランダの官憲に誰何されるかわからないのだ。

シャハダナ一行はグデ山の山腹に分け入った。難渋しながら道なき道をたどってかなりの山中に入ったころ、身重になっていた妻が旅を続けられなくなったため、庵を構えた。

[続く]

「南行き街道(55)」(2018年08月29日)

月満ちて妻は男児を産んだ。シャハダナの喜びはいかばかりだったろうか。かれはその喜びを表すために巨大な池を作ろうと考えた。今で言うならダム建設だろう。ありあわせの道具で、シャハダナとかれに従うひとびとが地面を削り、堤を作り、周辺の湧水を集める水路を設けた。7日後に出来上がったのがこのシトゥグヌン

だったそうだ。

周囲の風景によく調和したこの池がひとびとの噂になり、言うまでもなくオランダ人の耳にも入る。その池にお尋ね者が関わっているようだという情報を得た地元行政当局は捜査を開始し、1840年ついにシャハダナを逮捕する。

裁判で絞首刑の判決が下り、処刑はチサアツのアルナルンで行われることになった。ところがかれは脱獄に成功して行方をくらまし、かれの名を耳にすることは二度となくなった。遺族によれば、かれが没したのは1841年で、墓は遺族だけが知っている秘密の場所に置かれているそうだ。

グデ・パンラゴ山系南麓に位置するスカブミは、高原の台地を利用した茶やコーヒーの栽培、また豊富な水を使った水田などの農業地帯とし発展してきた。涼しい気候と緑あふれる美しい自然の風景を好んだオランダ人が農園事業主となってこの地方に住んだのも不思議はない。

スカブミの語源はスダ語の *suka bumen* だという説がある。インドネシア語に直せば、*suka menetap* だそうだ。一方、サンスクリット語由来だとする説は *suka bhumi* から来たと主張している。こちらの方も意味は「楽しむ土地」ということで、それほどの違いはない。

最初、スカブミはカディパテンブリアガンに属するグヌンパラン(*Gunung Parang*)という名の小さな村でしかなかった。後になって発展したチコレ(*Cikole*)がその村を呑み込んでしまう。

1709年に第18代総督アブラハム・ファン・リーベークはチバラグン(*Cibalagung*)、チアンジュル、ジョグジョガン(*Jogjogan*)、ポンドッコポ(*Pondok Kopo*)、グヌングル(*Gunung Guruh*)の視察を行って、コーヒー農園事業の可能性を実地検分している。チバラグンは今のボゴール市内西部にあり、またグヌングルはスカブミの町から4キロほど南東の地区だ。[続く]

「南行き街道(56)」(2018年08月30日)

ファン・リーベーク第18代総督やヘンドリック・スワルデクロン (Hendrick Zwaarddecroon)第20代総督はコーヒー栽培の拡張を目論んで、ボゴール～スカブミ～チアンジュルー円をその対象地区にすることに努めた。

時の経過とともに、グスングル(Gunung Guruh)地区に設けられたコーヒー農園は小規模な居住区を内包しながら発展した。そのひとつが チコレ村だ。1776年にチアンジュルのブパティ、ウィラタヌ四世がチコレにクパティハン(Kepatihan)を置いた。クパティハンチコレ はグヌンパラン、チマヒ(Cimahi)、チフラン(Ciheurang)、チチュルッ(Cicurug)、ジャンパンクロン(Jampang Kulon)、ジャンパントウガ(Jampang Tengah)の6ディストリク(Distrik)から成っていた。

オランダ人がやってきて周辺地域の土地を買い、自分の地所に農園を開くことが盛んに行われるようになって、チコレもオランダ人の町の態をなすようになる。

VOCが振興させた西ジャワ地方の茶やコーヒーの栽培はまずスカブミ地区が中心地をなし、それがおいおいバンドンやもっと東の方へ広げられて行ったというのがその歴史であるようだ。

バイテンゾルフが作られると、バタヴィア～バイテンゾルフ～チアウィ～スカブミ～チアンジュルというルートはVOCバタヴィアにとって重要な経済動脈路の意味合いを持つようになっていく。

ダンデルス総督の有能なアシスタントを務めたアンドリース・デ・ウィルド(Andries de Wilde)はバイテンゾルフの副レシデンの職務を後にして1808年にコーヒー栽培監督者としてバンドンに移った。そして1813年、かれはラフルズ、トーマス・マッコイド、ニコラス・エンゲルハードと一緒にスカブミの広大な土地を購入した。北はグデ・パンラゴ山系の南麓から南はチマンディリ川まで、西はバンテンとバイテンゾルフのレシデン区境界線、東はチクパ川までというのがその区画だ。

そしてかれはその地名であるチコレをやめてスカブミという名前に変更するよう総督に要請し、1815年1月13日に総督は公式にその地名をスカブミとする決定書を発布した。スカブミ市はその日を創設記念日としている。[続く]

「南往き街道(57)」(2018年08月31日)

オランダ人住民が増えて東インド政庁に住民行政サービスを求めるようになった結果、1914年4月1日、政庁はスカブミをヘメンテ(市制)に格上げした。

1926年に初代市長ジョルジュ・フランソワ・ランボネ(George François Rambonnet)が就任し、スカブミの町は見違えるように変身する。

バイテンゾルフから鉄道が伸びてきて駅が作られ、クリスチャンとカソリックの教会や大モスクが建てられ、ウブルッ(Ubrug)に発電所が設けられ、警察学校が開校した。この警察学校は軍隊の士官学校に相当し、警察組織の幹部を養成する役割を果たした。この学校は現在もインドネシア共和国国家警察幹部養成学校として機能している。

その過ごしやすい気候のおかげでオランダ人はスカブミにさまざまな学校や教育施設を設けたことから、学園地区の趣を呈した時代もある。バンドンをはじめとする西ジャワ地方のさまざまな土地に先駆けて、スカブミはバイテンゾルフに続く第二の文化と産業の中心地として発展した時代があったということだ。

特に茶の生産は一時期、東インド最大と言われたこともあり、国内は言うに及ばず、国外にまでスカブミ茶の名前は人口に膾炙した。今でもスカブミ市内からチマンガ(Cimanggu)経由でプラブハンラトゥ(Pelabuhan Ratu)に向かうプラブハン通り沿いには、往時林立した茶葉の加工工場の名残りを見ることができる。

スカブミの町から街道を北へ折れてシリワギ通りをまっすぐ北上していくと、1.5キロほど走ったところでスルヤクンチャナ通りが左から合流してくる。そこからは道路名がスラビンタナ(Selabintana)通りと変わり、この道を5キロ半ほど走って行くと、突き当たりにスラビンタナホテルがある。

周囲は緑蔭に包まれ、ホテルの前は広いグランドになっていて、高原の涼しい空気の下で自然を満喫することができる。ここにリゾートを作ったのはオランダ人レンネ(AAE Lenne)で、1900年にホテルが開業した。

スカブミ地区在住ヨーロッパ人はもとより、バタヴィアやバイテンゾルフからの行楽客が十分期待できるだけの位置付けを当時のスカブミは持っていたにちがいない。

1924年にホテルの経営は息子のGEレンネの手に渡され、有能なオランダ人マネージャーに恵まれてスラビンタナリゾートは大いに発展したようだ。

日本軍政期には日本軍が接收し、そこでのホテル業は継続されて、日本人が経営した。インドネシアの主権承認に伴ってホテルはインドネシア政府に渡されたものの、使われないまま数年が経過した。1953年に空軍中将がホテルを改装し、1967年に一般公開された。[続く]

「南往き街道(58)」(2018年09月03日)

パジャジャランスンダ王国が滅亡したあと、プラブ・グサン・ウルン(Prabu Geusan Ulun)王が1580年にスムダンララン(Sumedang Larang)王国を興してパジャジャラン王国の後継者を名乗った。王都はクタマヤ(Kutamaya)で、現在のスムダン市の西方に位置した。バンテンに服従したくない旧パジャジャラン王領の民がグサン・ウルン王に服属したのも当然だったろう。

グサン・ウルンの妻のひとりにはマタラム王家の娘だった。その息子ラデン・アリア・スリアディワンサ(Raden Aria Suriadiwangsa)が王位にあるとき、スムダンラランはマタラム・チルボン・バンテン・バタヴィアの四勢力のはざままで窮地に陥り、王は母の意見に従ってマタラムに降った。時のマタラム王はバタヴィアへの軍事進攻を行ったあのスルタン・アグンだ。こうして1620年以降、西ジャワの中ほどから以東はマタラム領となる。

スムダンラランをカディパテンのひとつに加えたスルタン・アグンは、バンテンとバタヴィアに対する防衛線をプリアガン(Priangan)に敷く戦略を取った。プリアガン地方とは現在のスカブミ・チアンジュル・バンドン・西バンドン・マジャレンカ・スムダン・ガルツ・タシマラヤ・パガンダラン・チアミスの諸県から成るスンダ文化の中心地帯だ。

ただその時代にマタラム王国が設けたカディパテンプリアガンという行政区域がカバーしたのはスムダン、

スカプラ、バンドン、リンバガンの各全域とチアンジュル・カラワン・パマヌカン・チアスムの一部地域で、アリア・スリアディワンサはスムダンラランからプリアガンへ移封された。かれはランガ・グンポル(Rangga Gempol)一世としてプリアガンのアディパティとなる。

ランガ・グンポル一世がスルタン・アグンから命じられてマドゥラ島のサンパン攻略戦に従事しているとき、プリアガンがバンテンの攻撃で大敗を喫したために父王の代理の任に就いていた王子がスルタン・アグンの怒りを買ってマタラムに虜囚されたことがある。そのとき、プリアガンの領主に格上げされたのが南バンドンのクラピヤツ(Krapyak)を根拠地にバンドン地区を治めていたディパティウクル(Dipati Ukur)で、かれは1629年のマタラム王国第二次バタヴィア軍事遠征にかり出されている。[続く]

「南行き街道(59)」(2018年09月04日)

マタラム王スルタン・アグンが没すると、後にアマンクラツ(Amangkurat)を号する王子が跡を継いだ。このアマンクラツ一世の統治は1646～1677年で、マドゥラの領主トルノジョヨ(Trunojoyo)の叛乱で王宮を脱出し、バタヴィアに保護を求めての逃避行のさ中に、バニユマスで毒を盛られて非業の最期を遂げた。

父のスルタン・アグンが示した対決姿勢をよそにアマンクラツ一世は1646年に、マタラムの支配地域にVOCが交易ポストを設けること、マタラムはVOCが支配する島々との交易を行うこと、また捕虜を互いに解放するといった交換条件に関する条約をバタヴィアと結んだ。

しかしかれは自分の息子で皇太子であるマス・ラツマツ(Mas Rahmat)と不仲になり、政策の不一致や私生活の争いが元で互いに相手を破滅させようとする関係に陥る。それを通奏低音にしてアマンクラツ一世はさまざまな要因から大勢の人間の生命を奪う殺人鬼と化し、それがかれの敵を更に増やすという悪循環が始まった。

マス・ラツマツはマドゥラ領主トルノジョヨと知り合い、親族に支援させて反乱を起こさせるのに成功した。トルノジョヨの叛乱軍にマカッサルやスラバヤからの応援軍が加わり、アマンクラツ一世はバタヴィアに軍事支援を求めて叛乱軍と対決するが、敗北したあげく1677年には自分の王宮が陥落してしまう。

父に替わってアマンクラッ二世となったマス・ラツマツはコルネリス・スピルマン(Cornelis Speelman)第14代総督が立てた総力を結集する叛乱軍撲滅作戦に加わり、スラバヤでの会戦で叛乱軍を敗った。そのあとは掃討戦となり、1679年にクルッ(Kelud)山でトルノジョヨが捕らえられて叛乱は終結する。

言うまでもなくVOCは功績の代償をアマンクラッ二世に要求した。こうして1678年にプリアガンとチルボンの支配権がバタヴィアに移譲されるのである。それ以来マタラム王国は徐々に徐々に、牙を抜かれた猛獣の立場に追いやられて行く。

1808年にオランダ植民地政庁はカディパテンプリアガンの地域行政システムに手を入れた。ダンデルス総督が大郵便道路を建設した年だ。大郵便道路はバイテンゾルフからチアウィを経た後、グデ・パンラゴ山系の東尾根を突っ切るルートを取って、山系南東に位置するチアンジュールに向かった。スカブミを通る迂回路をダンデルスは避けたということだ。

カディパテンプリアガンはプリアガンレシデン区となり、最初チアンジュールに首府が置かれたが、グデ山が噴火したために1864年にバンドンへ首府が移された。[続く]

「南行き街道(終)」(2018年09月05日)

歴史に登場するチアンジュール最初の領主はラデン・アリア・ウィラ・タヌ(Raden Aria Wira Tanu)で、パダルマン(Padaleman)チアンジュールを地名に称し、チクンドゥル(Cikundul)に領主館を置いた。かれは1677年から1691年まで支配権を振るった。かれはタラガ(Talaga)王家の後裔と言われている。

14世紀にガル王国の王族が現在のマジャレンカ(Majalengka)県の一地区の領主となり、スナン・タラガ・マンゲン(Sunan Talaga Manggung)を号した。17世紀になってタラガ王家のひとりアリア・ワンサ・ゴパラナ(Aria wangsa Goparana)がイスラムに入信したが、タラガ王国のスナンたちはヒンドゥを頑なに守り続けてムスリムを疎外したことからゴパラナはムスリム領民を連れ、故郷を捨てて西に向かった。そしてグデ山東山麓の無人の原野を開いて村を興し、そこをサガラヘラン(Sagara Herang)と名付けた。

その土地がマタラム王国領であるにも関わらず、アマンクラッ一世の目を盗んで西ジャワ内陸部へ勢力を伸ばしてくるバタヴィアに対して、ゴパラナの息子ウイラタヌ(Wiratanu)はきっぱりした対決姿勢を示した。だが程なくプリアガンはバタヴィアに移譲されたのである。

代替わりしたウイラタヌ二世のとき、バタヴィアのVOCはチアンジュールをレヘント行政区にし、ウイラタヌ二世をレヘントに任じた。1691年のことだ。

1707年にウイラタヌ三世が跡を継ぎ、レヘント行政区の首府をチアンジュール村に移した。この三世はバタヴィアの命ずるコーヒー増産に邁進し、チアンジュールレヘント区をプリアガンレシデン区最大のコーヒー産地に押し上げた。その努力を賞して時の第19代VOC総督ファン・スウォル(Van Swoll)はジャンパン地区をチアンジュールレヘント区に合併させることを承認している。

次のレヘントはウイラタヌ・ダタル(Datar)四世を称し、1727年に代替わりした。この四世の時代が終わる1761年までの間に、チアンジュールレヘント区は更にチバラグンとチカロンを区域に加えて目覚ましい拡張を遂げている。[完]